

證せんか君は安政二年三月十八日を以て和歌山市内町織田庄兵衛氏の次男に生れ夙に大鵬の志を懐いて明治八年單身東都に出で在ゆる辛酸を嘗めたる上東京株式取引所仲買人となり、遂に巨萬の富を得て今や尾張屋の商號を以つて熾んに營業を爲し直接國稅數千圓を納め傍ら株式會社織田商會、帝國證券信託株式會社其他多數株式會社の重役として今や帝都實業界の天地を闊歩して得々たるに至る。是れ皆君が辛苦の賜物なりと云ふべきも一面君の性機才に富めるの然らしむる處なりと云ふべきなり、令閨スミ子(元治元年生)は東京府平民尾崎金五郎氏の長女にして夫婦の間に長男佐太郎君(明治二十六年生)を設く而して佐太郎君は男爵多久龍三郎氏の姉秀子を娶りて織田家の推定家督相續人たり又盛なりと謂ふべし現住所、東京市日本橋區南茅場町

實業家 大井卜新氏

老ひて益々盛んなるの君は天保五年三月十日を以て本縣平民故大井源四郎氏の長男に生れ明治五年五月分れて一家を創立す、夙に本邦商業の中心地たる大阪に出で工業用藥品機械貿易商を營み及び硫酸製造を業とし直接國稅數千圓を納む、曾て三重縣郡部より選ばれて代議士となること兩回、日露戰役の功

に依り勳四等に叙せられ旭日小綬章を賜はる、現在君の關係せる會社を擧ぐれば東京硫酸株式會社、日本染絨株式會社、硫酸肥料株式會社、朝鮮水産株式會社、大阪電球株式會社、帝國石油株式會社、ラサ島嶼礦株式會社等の各重役にして其他無數の會社に關係せるもの多し、而して養子五十吉氏を迎へて長女まつゑ子の婿養子と爲し此の間又男女數名の孫を設け家庭は常に和氣瀟々たり現住所大阪市東區平野町四丁目九十二番地電話本局五四五番

有田輕便鐵道會社社長 山下太左衛門氏

資性謹嚴廉直、行爲公平無私敢て名達を欲せず自己の信ずるところを斷行するものを山下太左衛門君なりとす、君は本縣有田郡御靈村大字德田故屋田十左衛門氏の五男にして萬延元年十二月三日を以て生れ幼名を惣太郎と呼ぶ而して文久元年先代故太左衛門氏の養子となり明治二十四年十二月家督を相續して先代の名を襲ふ、有田輕便鐵道の敷設は全く君の盡瘁の結果にして之れが爲め君の財産の中ば以上は之に傾注したるのみならず、之に關して辛酸を嘗められたる察するに餘りありと云ふべし、然れども方

今既に湯淺、御靈間を貫通して地方に利便を興へられたるの功績は永へに没すべきにあらず、長女かね子(明治二十年生)の養子定市(明治十三年生)氏は同郡三輪権右衛門氏の長男にして帝國大學法科出身の秀才たり、而して今や縣立耐久中學校教師たり。現住所有田郡藤並村大字野田

辻野惣兵衛氏

方今大耳美々たる髭髯爛々たる眼光其の人沈毅剛壯の風采其の行堅忍不屈の情操地方政治家中稀に見るの名材たりし君は安政元年五月二十一日を以て縣下那賀郡根來村大字根來に生れ夙に公共の爲に盡瘁せらるゝこと多大なり、君が縣民の輿望を得て縣會議員に當選したるは明治二十一年にして同二十五年縣會副議長となり、同二十七年之れが議長となる、君の議長となるや能く議場を整理し歴代の議長中名議長の内に數へらる、又曾て那賀郡小田井水利組合長たりしことありたり、實業方面に於ける君は久しく和歌山米穀取引所の理事長たりし外和歌山縣農工銀行重役にして今尙は之れが任に在り彼の大正九年の春期縣會議場の庭前に建設したる濱口梧陵翁の銅像は全く君の盡瘁の功果たりき令聞しか子との間に男六人女一人を擧げ、長男保氏は夙に醫學士となり和歌山市屋形町四丁目に開業し、二男は折天し三男三郎氏は帝國大學法科を卒へ高等文官試験を経て警視となり現に廣島縣保安課長たり、四男五男又逝去し六男六郎氏は和歌山中學を卒業して目下家に在り又長女かめよ子は現縣會議員中の少壯家増尾房次郎氏に嫁し居れり又盛なる哉現住所那賀郡根來村大字根來

操觚者 井邊喜四郎氏

小狎奸諂市井無賴の徒を驅りて事業を起すものあり慈善博愛の世人を瞞着して首尾克く成功するや社會の多くは拍手歡迎して敢て怪しむものなし徒らに言議を大にして小吏を赫し佞辯を弄して慾望を買ひ風教の矯正を旗幟して得々たる操觚者流あり其の素行に至つては即ち腐腸小膽自ら風教を害するの素を爲す然も社會は贊評を放ちて敢て其の裏面を顧みざるなり星峰井邊喜四郎君夙に叙上の幣風を憤慨しつゝ操觚の業に従事せらるゝ、又以て偉なりとせずや、君は明治十八年五月を以て縣下那賀郡東野上村大字

動木石本喜助氏の四男に生れ、夙に操觚者たらんと志し明治三十九年五月始めて和歌山新報編輯部の人ととなり幾許もなく大阪毎日新聞和歌山通信部に入り更に同四十年紀伊毎日新聞に轉じ、同四十二年大阪朝日新聞和歌山通信部主任となり以て今日に至る、此間十有餘年一日の如く社會風教の爲に能く侃諤の

論を爲し世を裨益すること甚大なる以て知るべきなり、世上新聞記者多し而も日常の言行非難を受くるもの少からず、然るに君に至つては即ち然らず品行方正學動謹嚴議論正確眞に當世の新聞記者として恥づるなきは滔々たる和歌山縣の天地君の右に出づるもの殆んど稀なり、古人曰く「衣食足つて禮節を知り、倉廩滿ちて榮辱を知る」と君の此の謹嚴廉直なるは一は君の富有なるに因るべからんも、又一面君の特性の然らしむる處なりと云ふべきなり

君の井邊姓を名乗るに至りしは明治三十九年恰も君が新聞記者生活に入りし年二十歳にして海草郡岡崎村大字井邊、井邊房次郎氏の長女はな子(當三十二才)と婚し婿養子として以て同家に入りしものなりと而して夫妻の間既に三男二女を擧げ長男房夫君(十三才)は海草中學校一年生、次男秀男君(十一才)は尋常小學校五年生三男光三君(九)は同二年に學び長女かつ子(六才)次女靜江子(二才)は家に在り嗜々として庭内に遊ぶ現住所海草郡岡崎村大字井邊

男爵 紀俊秀氏

官幣大社、日前國懸兩神社の神職たりし君は明治三年十月二十四日を以て紀俊尙氏の三男に生る當家

は從五位下紀行義の後にてし後三十八世を経て從五位俊尙氏に至る世々神に奉仕するの身分たりし、嚴父俊尙氏は明治五年華族に列せられ同十七年七月男爵を授けられたり、此の子に生れたるの君は幼名を文磨君と呼び明治二十四年十月、日前國懸兩神社宮司となり、同二十九年八月家督を相續す、翌三十年七月同族の選舉に依て貴族院議員に當選し同三十七年再選せらる、而して三十九年日露事件の功に依り勳四等に叙せられ旭日小綬章を賜はりたり、令閨美稔子(明治八年三月生)は舊和歌山藩士山本晟忠氏の五女にして、富久子(明治三十八年生)富喜子(明治四十三年生)を擧ぐ、而して富久子は男爵令閨國貞氏の令弟從五位工學士令閨俊忠氏を婿養子に迎へ幻麗親睦他の美望する處となる、又君の令弟正六位勳六等紀俊氏(明治六年一月生)は分家して現日前國懸の宮司たり、現住所東京市四谷區永住町二ノ一五

明治大學長 木下友三郎氏

東京神田駿河臺上巍峨たる大建築物あり、之れなん全國幾多の青年子弟に權利義務の本義を教へ、法の眞理を授くべき校舎明治大學なりとす、明治大學は現今の私立大學中最も古き歴史を有するものにして、而も此の大學に長として多數教職員の信望を得、幾千の學生生徒より尊崇せらるゝものを我木下友

三郎君なりとす、君は元治元年八月四日を以て本縣平民木下續氏の兄に生れ明治二十六年七月分家して一家を創立せらる、而して明治二十一年帝國大學佛法科を卒業したる後多年行政裁判所評定官たり、而も此間私立法律學校の講師として幾多の子弟を教養す、而して評定官中正四位勳三等に叙せられたり、明治大學々長となりしは今より數年前にして同學長岸本辰雄氏の逝去に依り之れが後を襲ひしものなり、令閨鈴子（明治七年三月生）は本縣士族兒島謙三氏の女にして夫妻の間四男、二女を擧げ家庭頗る圓滿なり現住所東京府下豊多摩郡千駄ヶ谷町千駄ヶ谷九〇三番地

實業家 田井金藏氏

君子は其の位に素して行ふ其の外を願はざるなり此の故に夷狄に素して夷狄を行ひ貧賤に素して貧賤を行ひ艱難に素して艱難を行ふなり、今や聖天上に在す、しかして歐洲戰爭終熄後の天下は誠に泰平なり、夫れ既に泰平なり人又た焉を平かならざるを得んや世徒らに侃諤徒らに奇異徒らに珍奇、徒らに放蕩徒らに豪宕なるを以て得意とするものあり、又之に贊同するもの尠なきにわらず豈又緩急を知るものなりといふを得べけんや、吾人君が出處進退に關せず常に圓滿なる器材を有することに於て深く學ぶと

ころあらんとするものなり、請ふ君の經歷を記さん

君は文久元年九月十日を以て和歌山市北新三丁目二番地に呱呱の聲を擧げ、長じて田井家の戸主となるや區會議員を勤むること數年市會議員に選舉せらる、こと前後六回しかして今尙ほ之れが議員として市政の爲に貢献すること大なり、資性温厚、圓滿を以て人に愛せられ、曾て批難の聲を聞かず、其の信望の厚き以て知るべきなり、事業方面に於ける君は南海天鷲絨株式會社社長、和歌山養豚株式會社社長、日本織物株式會社、和歌山瓦斯株式會社の各監査役等にして其他眞善會事務理事、和歌山實業新聞名譽社長たり君の趣味は歌澤及び謠曲等にして現住所和歌山市北新三丁目二番地なり

新宮高等女
學校 校長 石川弘氏

温厚の態度謹嚴の言行以て心を養ふ寧靜の徳あるを見るべし謙遜辭讓嘗て風勵卓發の鋒銳を露さず以て身を保つに恭謙の素あるを知るべし、而して其の含蓄の氣風は自ら父兄學生の敬愛を増さしむ天賦の大器素養の深奥なるにわらずんば焉を能く斯くの如くならんや、君は舊和歌山の藩士明治十年を以て生

る祖先は今より三百年前徳川南龍公が駿河より入國の際同公に隨伴して來りしものなりと而して君は和歌山師範學校より更に東京高等師範學校に入り同校を卒へて後中學校に三年高等女學校に拾有七年勤績して今尙ほ之れが任に在り、此間二十年一日の如く謹嚴廉直以て其職に忠勤す蓋し異數と云ふべきなり君偶々感じて曰く「今後二十年を經過せば教育と云ふことが稍世人に理解せらるべし」と其の如何に教育に熱心にして又如何に世人が教育なるものを理解せざるかを言ひ現はして以て餘ありと云ふべきなり、令閨ミツ枝子との間に男貳人を擧げ長男官君は現に新宮中學校二年生たり現住所縣下東牟婁郡新宮町

貴族院議員
男爵

外松孫太郎氏

才氣横溢元氣旺盛曾ては世に處し縱横無盡に切り廻し遂に今日の美果を收めたるの君は弘化四年八月を以て舊和歌山藩士故大堀太右衛門氏の次男に生れ同藩士故外松孫左衛門氏の養嗣子となりて徳家督を相續せらる而して明治十二年始めて仕官して會計軍吏補となり、同十六年會計軍吏に進み、累進して同三十一年一等監督となり後ち、野田經理局長の骸骨を乞ふや、君拔擢されて監督監となり、經理局長に

勅任され尋いで主計監を経て主計總監に陞任せらる、彼の日露の間戦端を開始するや君經理の重任を負ひ措置其の宜しきを得、平定の後功を以て功二級金鷲勳章を賜はり勳二等に叙せらる、同四十年九月特に華族に列せられ男爵を授けらる、後貴族院議員に勅選せられ今現に其職に在り、而して議會閉會中は雜司ヶ谷の邸宅に在りて悠々閑日月を送れり令閨まき子(嘉永二年生)は市内故波切彦四郎の長女にして夫妻の間數子を擧ぐ而して長男龜太郎君(明治四年生)現に従五位勳五等功五級陸軍歩兵中佐たり、而して龜太郎君は子爵三好東一氏の姉琴子を娶りて長男良一君外數子を擧げ家庭は常に春風に挿し和氣霽々の感あり現住所東京府下北豊島郡高田村雜司ヶ谷七百三十番邸

門閥家
桑山新太郎氏

氏は明治六年四月十七日を以つて縣下海草郡安原村大字桑山豪農桑山茂四郎氏の長男に生る今桑山家の系統を擧げんに同家は元と藤原性左大臣魚名の裔結城上野介宗廣の三男三郎左工門尉親治の孫修理大夫定久の尾張國海東郡桑山を領せしを以つて氏とす桑山修理大夫定久七代以則嫡男重晴修理大夫從五位下法休して泉法印宗榮と改め治郎郷法印に任せらる、しかして大和大納言秀長に屬し武田城主にて一萬

石を領す其後、紀伊和歌山に轉じ三萬石に増加し豊臣秀吉公より和泉谷川にて一萬石を増す其の後數代を経て昌隆に至り武士を廢めて和歌浦に住す其の後六代玉州は幼名を爵又繼昇と云ひ、後嗣燦と改む當時文人の呼稱に倣ひて支那風に桑嗣燦と云へり字は明夫、通稱茂平治、後左内と改む、玉洲鶴麓明光居士、聽雨室、呵雲堂の號あり、書を能くし、繪事鄙言玉洲書趣等の著書あり、玉洲以前是れ以上の畫論なく、今日と雖も畫家の珍重措かざる所にして帝國大學に於てさへ美學を研究するもの何れも其の卓拔なるに驚かざるものなしと云ふ、玉洲先生は畫に於て今古有數の士たると共に桑山村の開墾を爲せるを以て知らる(桑山家には玉洲の筆に成れるもの多く内にも和歌浦十景圖の如き逸品と稱せらる)玉洲以後數代を経て茂四郎氏に至り更に新太郎氏に及ぶ村内の地所悉く同家の所有にして敢て他に讓與せざる如きは全國殆んど其の比なく、しかして小作戸數三十、人口百五六十多くは玉洲當時の子孫にして隨つて桑山家に對する主従の關係は今に至つて絶ゆる事なし、里人桑山村のお殿様と稱する蓋し謂れなしとせず。嚴父茂四郎氏は舊幕時代の太庄屋にして資性温良鼻下に鬚髯を貯へ身体長大なる偉人なりし。しかして維新後地方の小區長を勤め郡書記、登記官吏となり或は郡會議員、縣會議員に選舉せられたることあり、當代の新太郎氏は温良、高雅、鼻下に美髯を蓄へ悠々自適、自ら長者の風格を備ふ、令弟才次郎氏(明治九年生)は和歌山市に住し未弟孝氏(明治十二年生)は和歌山市の素封家岩崎家を相續し居れり

現住所海草郡安原村大字桑山

操觚者
(楚人冠)

杉村廣太郎氏

言語は一時の傳稱に過ぎず、文章は之を百代に繋ぐべし、言語は一場の提唱に過ぎず、文章は以て之を千里に達せしむべし左れば一枝の管城に藉りて聲名を擧ぐるもの其名譽の高きと同時に自ら重大の責任を荷ふものと云ふべきなり。吾人又操觚の業に従ふもの謹んで先輩君の傳を記さざるべからざるも如何せん其の詳細を知ること能はざるを以て茲に其の大畧を記さん。

君は明治五年七月二十五日を以て和歌山市岡南の丁に呱呱の聲を擧ぐ和歌山中學四年を卒へて教職員と意見の合致を缺き去つて新聞記者たらんと志し年輪十有九歳にして和歌山新報編輯部の人となる。是れ君が操觚者たるの第一歩たりし。爾來大鵬の志を有するの君は田舎の一小新聞の記者を以て甘んずる能はず幾許もなく同社を辭して上京して立教學院に入り英語を研究したる後外務翻譯官となり更に真宗

大學教授となり遂に東京朝日新聞に入りて以つて今日に至る。此の間歐米諸國に漫遊すること前後五回而して現今に東京朝日新聞調査部長たり、其の流暢なる筆致は以て讀者をして快感を叫ばしめ、其の正確なる論議は讀者をして學殖の豊富と該博なる智識に驚歎せしむ、而して今や全國君の號たる縱横を知らざるものなく、又其の別號たる楚人冠を知らざるものなきに至る、君又著書多く、舊著、「七花八裂」「翳きもの、爲に」等人の膾炙に存す、君又社務の餘暇慶應大學新聞科の講師として青年子弟に新聞學の教養を爲す我縣又君の如き偉才を出したる以て吾人の意を強ふするに足る、君夫れ自重して可ならずや現住所東京府下大森八景和田山王臺

陸軍少將 西山保之氏

嘗ては千軍萬馬の中に奮戰激闘能く敵軍を霹易せしめ今は功成り名遂げて悠々閑日月を樂み、而も國家の事を忘れざるもの之れ豈に西山保之君にあらざして誰ぞ、君は嘉永五年五月廿四日を以て舊和歌山藩士故西山瀧右衛門氏の男に生る、而して實兄西山正時氏の逝去に依り明治十七年十一月十日正時氏の死跡を相續す、君の本籍元と市内北河岸町五丁目一番地なりしも後現在の場所に變更す、曾て軍人たら

んと志して陸軍に入りて拮据勉勵少尉より累進して遂に少將となり、日清、日露の兩役には各地に轉戦して偉功を奏したりと聞く、又以て偉なりとす而して今は後備となりて郷に歸り悠々自適花に酔ひ月に戯れ以て樂しき歲月を送らる、令闈ふじ子(安政六年十二月生)は滋賀縣大津市北園町亡榎本半七氏の長女なり現住所和歌山市湊通り丁二丁目二番地

美顔水本舗
桃谷順天館主

桃谷政次郎氏

凡そ美を喜び麗を樂しむは獨り人類のみならず一般有情動物通有の性たり、是を本能と謂ふも妨げず而して此本能に屬する動物の美的感情は就中吾人人類の社會に在りて尊重さるべき價値を有す。即ち人類社會が人類としての形而上下に亘る有終の美を濟すに努むるは取りも直さず社會の幸福、人類の平和を進むる所以にして、精神美と相貌の美とは叙上の原理に基きて最も注意さるべき重要な問題ならずんばあらず。所謂才色の兼ね備はるわらば其本人の至幸たるのみならず同時に社會の和樂に寄與する所以の功德ある者と謂はざるべからず。然り此精神及相貌の雙美は文明の進歩、社會の和樂を増進する所以

の要項として人たる者の心懸くべき所とは謂へ、両者は車の両輪、鳥の雙翼にも譬へつべく、其一のみに偏するの誤れる以上、世に獨り其精神美のみを以て誇りとし、或は單に容貌美のみを以て得たりとする者の如きは未だ人類としての充全を期したるものと謂ふを得ず。而して形而上に就て大體より立論すれば男子は容貌軀幹鬼偉なるを要し、女子は清艶研美なるを上乘とす。是れ婦人が就中社會の和樂の中心たる使命を帯べる天分に照らして當然の歸結とする所、婦人美は婦人及一般社會の特に意を用ゆべきの案件なり。然れども精神美の向上は文化の發達、教育の普及と共に長足の進歩を遂げつゝあるも、容貌美の向上に至りては未だ科學の充分なる發達を見ざる今日猶は甚だ遺憾とすべき事情なきに非ず。然るに夙に茲に着眼して人類の美容的文明に貢献せむとの志を起しあらゆる苦心經營を爲しつゝ在る者、而して這箇の事業に大なる成功を收めつゝ在るを實に本縣粉河桃谷政次郎氏其人なりとす。氏は現に有名なる桃谷順天館主にして我國化粧品製造事業界の巨擘なり。文久三年九月十日那賀郡粉河町桃谷増次郎氏の長男に生れ、明治二十七年九月家督を相續しあらゆる化粧品中の白眉として著はるゝ、美顏水の發明に、幸運を打開し而して其商機を執るの智畧なるに相俟ちて其品質の優秀到底他の群少類似品の企及し得ざる神技が着々他を壓倒し事業日に擴張し、名聲月に揚りて、世人をして化粧品即ち美顏水を想到せしむるの域に達せり。然れども氏の斯業に對する熱心は益々燃ゆるが如き勢ひにして丹波藥學博士を始め二三の博士を顧問とし醫、理、農、工等の諸學士數氏を聘して各得意の方面を擔當せしめ日夜研究に力めしむ。而して之等に依り發明製造さるゝ同館の發賣化粧品は今や所謂美顏白粉を始め實に數十種の多きに及び何れも社會の歡迎を博し又特に高貴の方々より御用命を賜はりつゝ在り東京及大阪に宏壯なる店舗と研究試験所とを有し館運益々隆盛に直接國稅年數千圓を納めて多額納稅者の地位に達せり世桃谷の名を聞く者直ちに美顏化粧品を聯想す氏の第一趣味は即ち化粧品の研究及改良にして又多餘念あること無し。夫人コウ子は慶應元年那賀郡山崎村津村重兵衛氏の長女にして現貴族院議員津村紀陵氏の實妹に當る。夫妻の間に長男順一氏(明治二十年生)外數名の子女あり順一氏は大阪府藤井甚兵衛氏の次女初子を娶り(明治二十二年生)は藥學士にして現に父君の業を助けつゝあり現住所縣下那賀郡粉河町

和歌山高等
女學校校長
蘭部 倭氏

縣下女學界の金星として紀北の婦人社會に齊しく景仰されつゝあるものは縣立和歌山高等女學校なり

創立以來三十餘年、卒業生を出だすこと正に一千八百名、又現に在學する者六百名に達せり。而して卒業せる者は殆ど總て賢母良妻として克く其夫を助け子女を導き理解あり進歩に富める堅實にして光明ある家庭の主婦たる責務を全うしつゝあり。是れ其職員中に相當人材のあるあり且つ協心戮力以て本職を盡すに篤きの致す所なるも亦現校長蘭部氏が多年の功勞も否むを得ず。氏は海草郡有功村大字蘭部九百十九番地の舊家に生れ明治三十三年和歌山中學校を卒業し第三高等學校を経て三十年帝國大學法科を卒業して法學士となり暫らく新領土臺灣に官職を帯びしが間もなく教育界に投じて和歌山高等女學校教諭となり校長に進み以て今日に及べるもの能く全職員を統率し又改良施設する所少からず。趣味は運動、園基及讀書にして家族は母堂アイ子、夫人孝子、長男司氏(和歌山中學校在學)次男進氏(師範附屬小學校在學)及女學校在學中の一女あり(現住所和歌山市芝之丁一番地)

實業家 渡邊綱五郎氏

山は夫れ一杯土の集りなり、其の高きに及んでや棟梁の材茲に生じ連城の壁茲に座す、海は夫れ一勺水の積なり其の深きに及んでは魚鼈茲に躍り鱗介茲に湧く零細侮らざる微公指て久しければ即ち大を爲

す君一素寒を以て幾十萬の巨商となる其策又叙上の効のみ而して是れ既に後進の鏡なり君は明治五年十月十二日を以て縣下海草郡中の島村亡渡邊邦藏氏の長男に生れ、明治三十九年八月十六日和歌山市畑屋敷東の丁へ轉籍し大正九年九月二十七日更に市内小松原通り四丁目に轉籍せられたり、君の性伶俐にして機を見るに敏なるを以て其の商工業に従事するや、成さんと欲して成らざるなく、利せんと欲して利せざるなし、遂に巨商となりて市内屈指の大實業家たるに至れり、彼の和歌浦に於ける宏壯なる別荘は以て其の成功者たることを證明して餘ありと云ふべし、而して今や和歌山綿布株式會社社長として君が獨特の才能を以て縦横無盡に切り廻し居れり、公職としての君は大正六年和歌山市會議員に當選し次いで市參事會員となり、市の爲に貢献して以て今日に至れり、令閨しな子(明治八年三月生)は市内十一番町山野要之助氏の三女にして夫妻の間未だ子を成さざるを以て市内新中通一丁目福島嘉六郎氏の三男禎三君(明治二十九年生)を養嗣子として明治四十三年十二月入籍し居れり、令弟行太郎君(明治十四年三月生)は夙に帝國大學工科を卒業せる工學士にして大阪鐵工所因の島工場及び東京府下大島製鋼株式會社等の技師長たりしが今は去つて日本海事協會主事たり、現住所和歌山市小松原通り四丁目

陸軍中將 澁谷在明氏

有馬良橋將軍と共に最近本邦出身の武人界に於ける巨星として謳れたる者を陸軍中將澁谷在明氏と爲す。氏は舊和歌山蘇士澁谷在質氏の長男にして安政三年六月十九日を以て和歌山市に生れ活潑有爲の少年として近隣に推稱され自らも身を軍人に志し陸軍に入りて明治十二年騎兵少尉に任じ十七年陸軍大學に入り聰明の資、武畧の才益々研かれて光りあり大學を出ては重用せられて東宮武官、騎兵監副官、騎兵第十五聯隊長、輜重兵監等の要職に歴輔し、又日清及日露兩大役に出征して勳功を橋て勳五等に叙し功三級金鷄勳章を賜はる。斯くて累進して陸軍中將に任せられ又從三位勳一等に叙せらる大正三年八月豫備役に編入主馬頭となる。夫人ちわ子(文久元年六月生)は宮崎縣士族岡本藤吉氏の令妹にして夫妻の間に長女はつ子、次女みさを子あり、長女はつ子には山梨縣の人島田賢治氏の弟在義氏(明治十三年六月生)を迎へて婿養子と爲し孫明子(長女四十二年一月生)同輝子(次女四十三年七月生)同在正(長男大正元年十二月生)同忠男(次男大正四年六月生)等あり在明氏の次女みさを子)明治二十一年一月生)は東京府士族清水穂太郎氏に嫁し琴瑟相和しつゝあり(澁谷氏の現住所東京市麻布區我善坊町三十二電話五五二三番)

實業家 矢田 績氏

三井は岩崎と相並んで我財界双方の王者なり、其經營に係るもの銀行事業に、鑛山事業に、貿易事業に、倉庫事業に其他大小各種の事業に擧げて數ふべからず、其重なる事業は一億圓若くは數千萬圓の巨資を以て大規模に且つ堅實に施設經營せられざるなく之等事業に關與せる人材亦多士齊々たるものあり。而して三井の事業中主要の位地を占むる倉庫經營の事業に於て就中天下に知らるゝ大倉庫たる東神倉庫に在りて牛耳を執れる矢田績氏の如きは三井王國中の逸材にして該倉庫が我物資集散の中軸として取引上の緩急を刺し一種經濟界の安全辨たる機能を擧げつゝある所以のものは識徳並び至れる氏の經營手腕與かつて力あることを知らざるべからず。氏は本縣人谷井保氏の弟にして伊達只吉氏の兄に當る萬延元年八月當縣に生れ明治十九年七月矢田七郎右衛門氏の絶家を再興し夙に慶應義塾に學び出で三井銀行に入り累進して名古屋支店長となり温厚克く人を服し敏捷常に他を制す。經營の才幹亦衆に超ゆるものあり、遂に選ばれて東神倉庫の常務取締役となりて今日に及ぶ、蓋し今や三井王國に於ける元老の一人

なり、夫人そで子(安政五年生)は兵庫縣の名望家林健三郎氏の實妹にして淑徳の聞へ高き人なり(現住所東京市芝區田町八ノ一電話芝三五〇四番)

男爵 川口武和氏

川口家は先代武定氏より其名を知らる。武定氏は舊和歌山藩士にして明治二年藩の成兵大隊計司となり同七年陸軍會計軍吏に任じ爾來累進して二十六度五月海軍主計總監に任じ海軍省經理局長に補せられ二十八年八月功に依り男爵を授けらる。而して三十一年三月宮内次官となり盡す所少からず、三十七年七月貴族院議員に選ばれ以て大正七年此の世を終へり武和氏は即ち武定氏の次男にして明治十年二月十一日に生れ大正七年三月家督を相續して襲爵仰付られ以て今日に及ぶ。夫人富子(明治二十一年二月生)は男爵水野重吉氏の姉にて夫妻の間に長女喜久子(明治四十年二月生)は子爵武者小路公共氏の弟實麿氏の養嗣子となり又武和氏の妹楠枝子は子爵青木信光氏に嫁し其夫妻の間に男武豊(明治二十九年一月生)あり。即ち一門殆ど皆華胄界に屬し一族總て福徳を有す(現住所東京市赤坂區青山南町六ノ七三)

和歌山中學 校長 戸村定楠氏

開校以來茲に四十年、縣下中等教育界の中心的學堂として最も古き歴史と最も多大の人材を出せるに由り廣く其名の顯はれたるは縣立和歌山中學校なり。而して之れに校長たる者亦從つて其人物力量常に世の注目を惹く。中頃以後小泉野村等の名校長あり最近吉村校長を金澤に送りて同校より入れ替り現校長戸村氏を迎へるもの、蓋し近來兎角の評ある校風刷新の機運に因るものなりと云ふ。戸村氏の責任も輕からざるものありと言ふべし。氏は明治四年海草郡和佐村の豪族戸村又四郎氏の長男に生れ、少時より聰明にして篤學の聞えあり。明治二十三年和歌山中學校を卒業し第三高等學校を経て帝國大學法科に學び二十九年卒業して法學士となり直に逓信省に奉職し在職六年轉じて教育界の人となり明治三十五年青森縣立第三中學校長に任せられ三十六年富山縣立魚津中學校長となり滿七箇年勤績して生徒及父兄の信望厚く四十五年更に同縣高岡中學校長となり勤績滿七箇年に及んで功績多く北越地方官民の敬愛を鍾めしが大正七年十月榮轉して石川縣立金澤中學校長となり同校に於ても名校長として謳はれしが大正九年三月吉村校長の後を襲いて和歌山中學校に校長となる。和中は氏の母校たるに於て定めて快心の事

なるべし。人となり温厚謹直にして謙徳共に他を服するに足るものあり。趣味は讀書及運動にして夫人房子(明治十一年生)は前和歌山市長加藤杲氏の次女にして淑徳の譽れあり、夫妻の間に二男二女あり長女富子(三十三年生)は既に東京の技師に嫁し次女豊子(三十五年生)和歌山高等女學校を大正九年卒業して目下家に在り長男多望夫氏(三十九年生)は和歌山中學校二年級に次男寛明氏(大正元年生)は師範附屬小學校二年級に通學しつゝあり(現住所和歌山市豊原町和歌山中學校官舎)

素封家 小林甚五右衛門氏

孟軻曰「恒産なきものは恒心なし」と然り然らば恒産あるもの亦恒心あるや必せり、宜なり、現時壹百萬圓に近き資財を有し市内湊部に於て聲威隆々たる小林甚五右衛門君公共の志厚く又博愛慈心に富む以て恒心あるものと云ふべきなり、今小林家の家系を聞くに同家は元と藤原より出で今より二百五十年前徳川南龍公の駿河より入國の際同公に随伴して當市に入り以て君に至る十三代連綿として繼續し來る嚴父故甚五右衛門氏の幼名を龜次郎敬之と稱し後祖父の名を襲ふて甚五右衛門となる、君は慶應三年十月五日を以て和歌山市植松町十四番地甚五右衛門氏の長男に生れ幼にして倉田、奥村兩先生に就い

て漢籍を修め長じて嚴父の名を襲ふて甚五右衛門となる、蓋し君の家代々甚五右衛門を以て名とするを以てなり、而して世々財を蓄へ産を積み而して今や百萬に近き財産を有して意氣揚々たるものあり、方今君の關係せる事業の重なるものを擧ぐれば和歌山瓦斯株式會社大阪中央土地株式會社南海運送株式會社等の各監査役正金貯蓄銀行 南海商工株式會社の各取締役にして其他公益社團和歌山眞善會の理事たり又公人としての君は現に所得稅調査委員和歌山教育會理事在郷軍人名譽會員たり令閨リヤウ子(明治六年生)は海草郡松江村松本利右衛門氏の長女にして夫妻の間四男の子寶を有す長男尙一君(明治三十年生)は和歌山中學校を卒業して目下早稻田大學政治科二年、次男義男君(三十四年生)は和歌山中學校を卒業して早稻田大學高等豫備科に、三男享三君(二十九年生)は和歌山中學校二年生、四男喜四男君(四十四年生)は尋常小學三年生たり、令妹しづ子は市内實業界の重鎮廣田善八氏に嫁し實母小仙子(弘化元年生)尙は健在にして家庭は常に春海に帆を揚げ内海を棹すの概あり(現住所和歌山市植松町十番地)

實業家 松井伊助氏

株式が財界の消長をなすべきハロメーターとして文明國の經濟組織に最も重要な價值を占むるは言

ふ迄もあらず。されば理解ある取引は眞箇文明的商取引にして之が輸贏を争ふは亦一種の文明的快投資に屬するを疑はず。之を一概に投機とし或は賭博として貶し去るべきものに非ざるは近世學者の一般に認むる所なり。而も商機を掴むの才能及技術を要すること他の如何なる事業にも超ゆるものあるを以て之に依りて最後の勝利を博する者未だ甚だ稀れにして、松井伊助氏の如きは全く斯界の麒麟兒と稱するも過言に非ず。

氏は慶應元年三月十七日和歌山市内町松井仲次郎氏の長男に生れ舊名を岩太郎と稱せしが明治十五年七月家督を相續し名を改めて伊助と呼ぶ。少にして俊敏商才あり。夙に人生を達觀して名利執れにせよ徹底的なるべきを男兒の本領なりと爲し、奮然身を躍らして事業界に投じ不屈不撓能く辛酸艱苦に耐へて健闘し相當の資を得るや株式界に出陣して大阪北濱の仲買人となり幾浮沈を累ね、機智穎才常に能く先を利用して斯界に偉功を奏し今や直接國稅一萬餘圓、我國多額納稅者中錚々たる一人にして現に北濱信託株式會社取締役たり。而して其機智は北濱の太閤様と呼ばれ株式界西方の大立物と稱せらる。夫人しげ子(明治元年生)は本縣の人野田カメの次女にして夫妻の間に長男正造氏(明治二十一年生)次男輝三氏(二十八年生)四男龍三氏(三十三年生)及長女千代子(三十七年生)三女とみ子(三十八年生)四女てる子(

大正三年生)等あり。福德共に圓かにして明治及び大正に亘る株式界に於ける大成功者として其旗幟北阪の空に爨たり現住所大阪市東區北濱一丁目十六番地電話本局八〇七

實業家 楠本武俊氏

各種の建築及工作物の進歩に於て看過すべからざる重要な位地を占むるものはセメントなること何人も之を疑はず。而して現今セメントの製造工業界に重きを爲せる蓋し旭セメント株式會社の右に出づるもの稀れなり。旭セメントは實に當縣出身楠本武俊氏の創立經營に係る。氏は文久元年十月二十七日楠本権吉氏の次男に生れ、明治三十七年十二月先代楠本恒輔氏の養子となり其家督を相續せる者。是より先き明治十七年慶應義塾を卒業して二十七年日本郵船株式會社に入り釜山、仁川、伏木、孟買及香港等の各支店長に歴任し敏腕家として聞えしが獨力事業界に雄飛せむことを志し大正五年同社を辭して旭セメント株式會社の創立に奔走し擧げられて同社々長となり經營宜しきを得て社運日に隆盛に向ひ殊に戰時工業界の殷賑に伴ひ建築工事の勃興に連れて同社の事業も繁忙を極め優秀なる品質一般の認むる所となりて旭セメントの名廣く領知するに至り同社の基礎亦爲めに鞏固を加へて戦後財界の不況時代に入

りても微動だも感ぜざるの状に至れるのみならず。廣く東洋各地に輸出して前途益々多望の境遇に立てり。是れ時代の要求當さに然るべきの事情に由ると雖も抑も亦氏の縦横の機略と寸時も苟直にせざる經營上の奮勵努力の餘徳に因るものなり。此他猶ほ氏は日本綿布株式會社の取締役を兼ね經營の才能く人の信服する所となる。夫人日登子(文久二年生)は廣島縣の人八谷善五郎氏の妹にて夫妻の間子なきを以て京都府の人佐々木藤次郎氏の次男吉次郎氏を迎へて養嗣子と爲し之にひで子(明治二十五年生)を娶はして其間に忠次氏外數名の愛孫を擧ぐ(現住所東京府豊多摩郡佐々木山谷二九四電話番号一八五八)

宗 教 家 日 疋 信 亮 氏

一方に四海を同胞とし宇内を一家とするコスモポリタニズムを理想とすると同時に一方には宇内に冠絶する我帝室の御稜威を飽く迄宣揚するの使命を有するエムペリアリズムを遵奉して國家の祥運と世界の平和とを達成すべく隱健にして雄大なる思想を把持しつゝ、晩年を宗教界に託して精神的經綸を行はむとしつゝ、在る者は日疋信亮氏其人なり。氏は安政四年十二月朔日海草郡黒江町日疋文十郎氏の弟に生れ明治十八年一月分家して一家を創立し夙に身を軍籍に置き明治十六年八月陸軍歩兵少尉に任じ二十五年

十二月陸軍經理學校に入り二十七年七月卒業して陸軍監督補に任せられ爾來近衛及第三、九、七各師團監督部課長、第六及第七各師團經理部長等に歴補して日清戰役には混成支隊司令部、近衛兵站部附として出征し又日露戰役には留守第一師團經理部長、滿洲軍倉庫長の任を受けて大に功あり勳三等に叙し功四級金鵄勳章を授けらる。明治四十四年六月陸軍主計監に陞任し大正三年七月豫備役に編入せられ舊紀州藩主徳川頼倫侯の家令となり力を致す所ありしが大正五年其職を退き日本基督教會特派員として歐洲教界の視察に趣き歸來東京四谷に在りて社會の精神指導に従ひ宗教界の明星と稱せらる。夫人かよ子(安政五年生)は廣島縣川本文吉氏の二女に生れ賢夫人の聞あり長男誠氏(明治二十三年生)次男道夫(二十八年生)等あり家庭極めて和樂に充つ現住所東京市四谷區愛住町五四、電話番号町一、三六二

市 會 議 員 有 地 光 之 助 氏

沈黙、寡言にして豪膽磊落小事に拘はらず末節に泥ます如何なる難事に遭遇するも泰然自若喜怒色に現はさず、然も能く人を容るゝの雅量寛く、大事に臨んで堅忍不拔、果斷流るゝが如く、而も和歌山市會議員中否な和歌山實業界中智者を以て自他共に許せる有地光之助君は明治八年九月二日を以て亡嚴父

芳之助氏の男に生れ、小笠原譽至夫君、有地榮之助君等と兄弟たり、君の原籍は元と市内本町六丁目たりしが、明治三十九年三月現在の場所に本籍を變更せらる、實業界に於ける君は君獨特の智囊能く機を見るに敏なるを以て他人を利し又自己を利せしめ今や和歌山市内實業家中録々たるものなり、更に公職としての君は市會議員に當選すること三回、而して今現に之れが議席に列して其任に在り、侃諤の論議を爲すに非ざるも帷幄の内に在りて能く謀事を廻ぐらし以て自己の意見を徹底せしむ、又以て偉なりとす先妻ハル子との間に長女貞子(明治三十九年生)長男利男君(明治四十一年生)次男寛(明治四十二年生)の二男一女を成したるも破鏡の歎あり大正五年の春花開き鳥歌ふの好時季更に市内北田邊町高城氏の令妹澤子を娶りて、勾麗イト睦まじく家庭又圓滿たり現住所和歌山市橋町十五番地

の 市會議員 永原常楠氏

永原家は素と河内の國永原より出づ依て氏となす海草郡雜賀崎村鷹の巢に於て遷化せられたる顯如上人河内より紀伊に入りし際隨伴し來り元と吹上の峯(今の塩道)に住して魚間屋となり、徳川南龍公駿河より入國せらるゝと同時に藩公の御用達を命せられ、西の店に移轉す、彼の「御納屋」の家號は南龍公よ

り賜りたるものなりと而して世々藩主の御用達を爲し明治六年に至つて現在の場所に移轉し今日に至り尙は魚間屋として繼續し「御納屋」の屋號を知らざるものなし

君は明治三年十一月を以て海草郡雜賀村大字鹽屋小搦成美氏の長男に生る、小搦家は舊幕時代の庄家にして地方の名家たり而して君は明治三十三年故永原勘三郎氏の養子として同家に入りて稼業に勵精す大正六年和歌山市會議員の改選を爲すや押されて候補となり、之に當選して市政の爲に盡すこと甚大なり、令閨くま子(明治五年生)との間に男二人女三人を設け長男常太郎君は本年二十一歳にして國民の義務たる兵役に徵されて本年第六十一聯隊に入營すべく、長女富子(十八才)昨年和歌山實科高等女學校を卒業して目下家に在り次女増子(十五才)は家に在り三女竹子(十二才)は尋常小學校六年、二男英雄君(十才)は尋常小學校四年たり現住所和歌山市材木町

法學博士 津村秀松氏

鬮々の氣熊野六十三峯の青黛に映じ、悠々の氣和歌浦灣の淡烟に和す、山紫水明襟帶城を成す、開國貳千有餘年の紀伊、古來幾多の偉人傑士を出せり、内には沈毅謹厚の達徳を具へ外には精確、明快の卓

識を有し學説は宇内數千の後進を動かし談論は天下希有の先輩を歎せしむ、我國經濟學界の巨人として其の意氣神明に融合するもの之を津村秀松氏となす其の貫屬は和歌山縣日高郡の平民、其の出生は明治十五年六月なり、夫れ梅檀は二葉にして其の香を放ち龍蛇は寸虫にして其の寛を吐く君が幼年の時代固より這般の消息を知るに難からず、一言以て之を蔽へば曰く神童是れなり令兄津村英三郎氏は今や日高實業界の重鎮にして現に日高銀行頭取、那智水力電氣株式會社々長 日出紡績株式會社取締役として聲威隆々たるものあり、此の兄を有するの君は和歌山中學を卒業したる後東京高等工業學校に入り優等の成績を以て同校船工部を卒業し久しく米國に留學して經濟學を修め、歸來直に神戸高等商業學校の教授となりて幾多の青年子弟を教養し大正四年三月に至り、遂に名譽ある法學博士の稱號を得るに至れり而して大正八年七月同校を辭して久原鑛業所に入りて理事となりて今日に至る、令閨久子（明治十九年三月生）は從四位勳四等三十四銀行頭取小山健三氏の二女たり、現住所神戸市葺合町なり

志士
和歌山タイ
ムス社長

志賀法立正氏

夙に關西に於ける一大奇傑として兒童走卒にも謳はれ、常に自ら不滿不審とする所に戦ひを挑んで幾多の苦酸を嘗め全生を數奇の運命に托しつゝ、ある者を志賀法立正其人なりとす。氏は安政五年和歌山市久保町一丁目の名族にして素封家たる志賀氏に生れ當年六十三歳なり。幼より學を好みあらゆる漢籍を涉獵して諸子百家の説に通ず。資性極めて洒々磊々頗ぶる名利に淡く殊に金錢を觀ること土塊の如くにして當時市内屈指の富豪と稱せられし資産も暫間にして之を消盡し而も恬として意に懸くる所なく。奇行頗る多く二十五歳にして縣會議員に擧げられ長鯨の氣と侃諤の議常に議場の光彩たりしも當時議事堂使用の椅子の如き籐張りつくめの極めて粗野なるものなりしが喫烟は之を禁じ居たりしを氏は三尺の長煙管と大形の蒲團とを家僕に持たせ議席に着きて自ら蒲團を被り煙管を執りて盛んに其の烟を吹く。袴の如きも固より着けたることあらず。而して人咎むれば即ち曰く「蒲團は六十萬縣民の代表者たる志賀にして志賀一箇の身軀に非ず。故に保護せざるべからず。又袴は貧人が質物として典したる場合は着くるを得ず。議員は議員たるの智識に依りて縣民より選ばれたるものに外ならざれば特に着袴するの要を認めず」と當時の議長菱沼氏困惑すること夥し。濱口梧陵翁坐視するに忍びずして仲裁すれども肯んせざりき會て市の學務委員たりしことありされど一切給料を受けず。當局其處置に困じ氏に請ふて受く

る能はずんば之を公共事業に寄附せられんことを以てせるに氏は「給料は予の物に非ざるに依り予に處分を請ふも無意義なり」と。茲に於て當局は己むなく木杯を贈りしが氏は即座に之を地に敲き壊せり又米穀取引所理事たりし事あり受くる給料の全部は之を常に小使其他下級使用人に與へたり。時に一萬餘圓の欠損を生せる事あり氏曰く予は事務を執る者に非ず便利なるかならざるかと定めるのみが予の仕事なり其他の事は與かり知らず、されど欠損とあらば予の財産より補填せられよ」と。以て理財に短なき金錢財帛の慾に淡々たる皎潔の資性を伺ふべし。曾て和歌山監獄が在監囚徒をして木挽を行はしめしとき市内の木挽職人等百五十餘名は之を彼等の生活の脅威なりとて結束して縣廳を包圍し將さに焼討せんず形勢を示せしが當時の小山縣令事態重大と觀て當時民衆の間に勢威を有せし志賀氏をして之を退散せしめんとし其意を氏の許に通じたり。氏即ち之に應じて縣廳に馳せ參じ高處に登り聲を勵まし彼等の暴舉を非として穩健の手段に頼るべきを懇諭したるに彼等も氏の大演説に信服して退散したり。同時に氏は縣令に對して自今監獄囚徒の木挽事業は内部用に就ての外之を行はしめざるべきの陳情書を提出して縣當局の容るゝ所となり圓滿なる解光を得たり。斯くて氏の勢力漸く張るや縣會議員の一派は何等かの機會に氏を葬り去らむと企てるに至れり。恰も一夜稅務官吏が酒造検査の爲め氏の宅を叩け

り。然るに氏は夜も既に開けたれば明日又來るべしと告げ飽く迄検査を拒絶せり。於茲乎某議員は直ちに之を採りて官吏侮辱罪の名の下に告發したり。裁判所之を受理して氏を召喚せむとすれども應ぜず。爲めに豫審判事自ら氏の宅に出張して調書を作製したるが後控訴して大阪に送致さるゝとき俾に依るに非ずんば行く能はずと稱し頑として他の方法に依る送致を肯せず。されども當時の當局に斯かる規定も經費もなく亦氏自身も之を支拂ふ能はずと主張するより己むなく監守たる人々が醜金して之を支辨したり。猶ほ其際同行の未決囚六名ありしも看守等は何れも氏の方に注意したるを以て堺署に着する前他の六名は隙を窺ひて逃走せり。然るに是れ氏の相謀りて彼等を逃走せしめしものとの嫌疑の下に更に罪責を受けむとしたるが其内の一名捕はれたる爲め疑雲釋明するに及べり。其後陸奥宗光と中原の鹿を争ふこと三四たびに及ぶ。陸奥が大臣として即ち治者として被治者たる人民より選ばれむとするは道理に反すこの主張の下に勝敗を度外に置きて相戦へり。而して遂に陸奥を倒して千田軍之助氏をして代議士たるを得せしめたり。氏が巨額の財産を蕩盡したるは主として此の長き政争の爲めなりき氏は又夙に操觚事業に趣味を有し和歌山タイムスを興して自ら之が經營に當る。敬神崇祖警世愛民を以て社是と爲し侃々諤々あらゆる社會の性實と弊處を論撃して憚る所なく何等の恐るゝ所なし。爲めに筆禍を買ひたるこ

とあるも己むを得ざる所と謂ふべし。有名なる四十三銀行攻撃事件は遂に氏をして信用毀損罪の名の下に繹繼の禍に陥らしめたり。公判當時に就て一種の悲劇とも謂はる、は氏が辨護士を依頼せむとしたれども大阪、京都、神戸等關西各地の辨護士は銀行系の手が廻りし爲めに一人として氏の爲めに辯護に應ずる者なく已むなく名古屋以東に物色せざるを得ざりき。誰れか之を聞いて當時社會の冷酷に泣かざるを得んや、於茲乎氏は曾て學資を投して養成したる志賀亘辨護士を東京より呼び寄て又新たに市内に開業したる義氣に富める某辨護士の二人に依頼したり。公判開廷劈頭係檢事に對して忌避の申請を爲したるも却下せられき。氏の罪名は信用毀損及脅迫の兩種なりしが毫も脅迫の事實なきを以て氏は四十三銀行を攻撃したるは單に立腹せるより爲せる事にて問題は精神的、哲學的、宗教的の觀念より出づ。法律上の問題に非ざるを以て最後の答辯を爲さざるべしとて頑として答辯せざりしが結局大審院の終審に於て六箇月の處刑を受け出獄後又大に破邪顯正の銳鋒を提げて社會に奮闘せむと期したりしも星移り人替りて其的を失へり蓋し氏の如きは近世數奇傳中の一人なりと謂ふべし趣味は酒及馬にして少年時代より數頭の馬を飼育し以て居常の友と爲し又酒は一夜に十八軒の茶屋を飲み歩けることあり。然れども女色は絶對に遠ざけ今猶ほ堅く獨身生活を恪守し、夜は深更迄讀書に耽りつゝ餘生を閑雲の間に送らむとするものゝ如し、現住所和歌山市車坂町

とするものゝ如し、現住所和歌山市車坂町

實業家 内田縫次郎氏

度量寛濶雄大の風ありて正に紀州健兒の性格を有する者は即ち内田縫次郎君なり君は明治元年七月十六日を以て縣下海草郡貴志村大字榮谷故貴志彦太郎氏の次男に生れ同二十六年、和歌山市港材木町内田文左工門氏の長女ひさる子と婚して同家に入る、内田家は世々町役人として相當の名望を有せり、之れより先君は小學校卒業後海草郡楠見村大字栗生川上塾に入りて五年間漢籍を修め、明治二十三年和歌山縣土木課に職を奉ず、而して同二十九年有田郡工區主任心得となり、同三十一年東牟婁郡主任となる君の土木課に奉職すること十有五年一日の如く能く忠勤を振んず、其の熱心其の忠實、以て思ふべきなり、資性度量宏大且つ義氣に富む市内好個の一紳士たり、而して君の市會議員に選舉せられたるは同四十三年にして前後二回同議員に當選し常に侃諤の議論を爲して能く市政の間に盡瘁せられたるは市民の均しく徳とする處なり、又實業方面に於けるの君は、山東輕便鐵道株式會社の監査役日本焙道株式會社の専務取締役たるの外土佐セメント和歌山代理店として以て大に活躍し居れり、令閨との間に六名の子

女を有し長女種子(當二十六才)は十有九才にして和歌山高等女學校を卒業して最近海草郡四箇鄉村矢田佐太郎氏の二男信之助君(當二十六才)を婿養子となせり(信之助君は和歌山中學校卒業後師範學校二部生となり同校を卒へて目下市内廣瀬小學校に於て教鞭を執り居れり)次女樂子(十九才)は大正七年和歌山實科女學校を卒業し三女房子(當十七才)は現に實科女學校三年生四女歌子(當十三才)は同校一年生五女なみゑ子(當十一才)は尋常小學五年生六女正子(當九才)は同二年生にして何れも家庭に在りて一家團樂して風波起らず和氣霽々たり、現住所和歌山市港材木町四十九番地

文學博士 三宅米吉氏

本縣は他の府縣に比し學者多からず然れども、尙ほ十數名の博士を出せり、内にも文學博士の榮譽を有するは、君の外柳亮三郎君あるのみ、今茲に君の經歷を記さんに君は萬延元年五月十三日を以て和歌山藩士三宅榮元氏の長男に生れ幼にして神童一を聽いて其の十を悟るの明を有す、三歳にして早くも習字を學び七才にして藩費に入る、嚴父の宮内省に奉仕するや君三浦安氏に従ふて上京し慶應義塾に入る、而して年齢僅かに十二才在學三年父君の新潟に轉勤せらる、や君又隨つて新潟に趣き、明治九年七月

初めて新潟英語學校教員心得となる、是れ君が教育事業に従事するの濫觴なりとす、而して同十二年再び上京して舊友上原氏に據りて舊主所藏の史書を借覽し大に史學研究の志の興す、明治十五年千葉縣師範學校兼同縣中學校教員となり、後東京師範學校教諭に進む此間常に史學の研究を怠らざりき、後書肆金港堂の聘に依り同校を辭して金港堂に入り明治十九年英米諸國を歴訪して書店の實況を視察調査し同廿一年歸りて同堂の編輯長となる同二十三年帝國博物館陳列品取調の囑托を受け又高等師範學校の講師となり同二十八年博物館學藝委員を命せられ同年三月金港堂編輯長を辭す、翌月高等師範學校教授に任じ正七位に叙せらる、同三十年四月高等官五等に陞進し尋いで、從六位に進む、此の間文部省圖書編纂委員文部省教員檢定試験委員、尋常小學校教科細目調査委員等を歴任し又各所に於ける諸學會の議員幹事となること枚擧に遑あらず、而して明治三十四年博士會の詮衡を経て遂に文學博士の學位を授けらる而して今現に東京高等師範學校教授正四位勳四等たり令聞さとし子(慶應二年生)は群馬縣士族反町慎行氏の長女にして夫妻の間長男晁(明治十九年生)の外三女を擧ぐ、而して女子は何れも良縁を求めて他に嫁し居れり君又著書多く「史學提要」の如き氏の筆に成れるものなり、現住所東京市小石川區原町一〇三番地

市會議員

和關龜吉氏

立憲國民黨和歌山支部長として中央政治に興味を有し之れが黨務擴張に盡瘁せらるるの外市會議員として市政の爲にも又努力を怠らざるの君は明治元年を以て縣下政治の中心たる那賀郡上岩出村大字水栖山本利兵衛氏の次男に生れ、明治二十年和歌山市西仲間町舊和歌山藩士和關萬藏氏の養嗣子となりて同家に入り幾許もなく市内下鷹匠町巾下秀之助氏の姉はな子(當四十八才)を娶り、夫妻の間四男、二女を擧ぐ長男萬藏君(當二十八才)は夙に和歌山中學校を卒業し目下家に在りて妻かめ子(當二十四才)と婚し既に孫章君を生む、長女正子は曩日新宮町高等工業學校出の秀才榎本氏に嫁し、二男英二君(十九才)は家に在り、三男武三君(十六才)は海草中學校三年生、四男靜(十三才)二女文子(十五才)等又何れも家に在り氏の市會議員に選舉せられたるは大正元年にして同五年の改選期に於て再び同議員に選ばれ目下尙は其任に在り資性快濶にして又能く愛嬌に富む故に能く衆に愛せらる。而して今現に市内目抜の場所たる元寺町一丁目に「雜萬」と稱して旅館を營み常に殷賑を極む現住所和歌山市元寺町一丁目

水力電氣株式
會社營業課長

月澤增男氏

人生の目的は活動なり。活動の目的は成功なり、人豈に成功を知らざるべけんや。然れども人格なく素養なくして徒らに成功を急ぐものは終生眞の成功に進む能はず。君は一定の學を修めたる後官界に入り常に孜々として飽まざる修養と相俟つて悠々乎として階段的に社會的地位に進み後更に實業界に轉じ茲に始めて牢として抜く可らざる地盤を固む寔に當世の妙諦を會得せるものと謂ふべし、君は明治五年十一月を以て肥前國島原故月澤說誠氏の長男に生れ幼少より海國男兒の意氣を以て育てられ、男性的總ての素養を有すると同時に一面亦温厚篤實にして所謂強い許りが男に非らざる人生の眞味を知る、蓋し得易からざる模範的好實業家なり。

明治二十六年私立熊本法律學校を卒へ二十九年初めて臺灣總督府法院書記を拜命し三十一年更に轉じて長崎及神戸の各稅務監督局に勤務せしも同三十五年感ずるところありて官を罷め某氏の囑托に依つて南北支那の視察に赴き三十七年歸朝すると共に長崎縣水產聯合會理事に推され、越へて四十年群馬縣屬に轉じ勸業主任の要職に任せらる、翌四十一年遂に和歌山縣屬を拜命し再び勸業主任の榮位を贏ち得る

に至れり。四十四年會計課長に進み大正三年伊都郡長に榮轉し正八位に叙せらる。同四年海草郡長に轉じ當時九鬼前郡長の後を受けて尠なからざる功勞あり即ち同年十一月從七位勳六等に叙せられ同八年更に從六位に叙せらる。大正九年六月明渡益一氏の跡を襲ふて遂に和歌山水力電氣株式會社營業課長の要職に就き現に君が多年濫蓋せる才智を以て其手腕を振ひ社運隆々として日に進みつゝあり。君が永住不斷の活動の餘力は一面君を趣味の人たらしめ一度家庭に入るや詩を賦し碁を圍み而も尙謠曲の奧義を極む。夫人セツ子(四十五才)は夫君の同郷大崎得衛氏の三女にして長男十郎君(二十一才)長女文子(十六)の慈母にして十郎君は既に鹿兒島第七高等學校を卒へて東京帝國大學法科大學に學び長女は現に和歌山高等女學校第二學年たり原籍及び現住所は和歌山市磯山町

實業家 岡村宗助氏

伊那兩郡は縣下人材の淵源地たり、學者、政治家、實業家等幾多の人材を排出し天下を聘脱するの實狀を呈するもの伊那兩郡ならずして又何れの地にかある、君は明治六年十一月二十六日を以て縣下人材の密林たる伊都郡妙寺町に呱呱の聲を擧ぐ、君の祖先中時に商あり、農あり、工ありたる内にも嚴父は

友と圖つて私學校を興し、或は養蠶傳習所を開設し、機械製綿事業を經營し、又或は銀行を組織する等、社會の爲に貢獻すること大なりし人たり、「實に璧は金石を生む」とかや此の親の種に宿れる君は又金玉なりき、明治二十三年を以て慶應義塾を卒業したる後郷に歸り、嚴父の意思を繼いで在謂事業に従事して着々として功を收め以て今日に至れり、現在君の地位を擧ぐれば公職としては妙寺町々會議員、同學務委員伊都郡教育調査會委員として自治政の爲に盡粹さる、更に實業方面に於ては株式會社伊都銀行頭取、妙寺製糸株式會社長たるの外、和歌山縣蠶糸業調査會委員、大日本蠶糸會協議員として實業方面に盡粹せらる、又以て偉なりとせずや、君尙ほ前途春秋に富む、自重自愛して、國家の爲に否な國家産業の爲に努力を重ねられんことを希望して此の筆を擱く現住所縣下伊都郡妙寺町(電話二十五番)

貿易商 藤田俊夫氏

冒頭君の家系を記さんに、抑々藤田家は縣下那賀郡川原村大字西川原の舊家にして祖先は代々庄家を勤め苗字帯刀を許されたるの名門家たりし嚴父繁之助氏は維新後、久しく戸長となり、次いで村長として村治の爲に盡粹せられたるの外一方我縣の特有物産の一たる柑橘の栽培及び販賣に努力し爲に賞勳局

より本邦實業家の最大褒賞たる藍綬章を下賜せられたる功勞者たり、君は、此の名譽ある繁之助氏の長男にして明治三年を以て同地に呱呱の聲を擧ぐ、幼にして神童長じて又、ただの人たらずして敏慧能く人の機先を制す廿一才の時將來我國は商業によりて立たざる可からず而して商業は日米間の通商に尤も重きを置かざるべからずとの信念の下に明治廿三年十一月意を決し米國に渡り加州オークランドのコールスクールに入學し同校卒業の上更にサレノゼイ商業學校に入學明治廿八年十一月同校を卒業して歸朝せり而して君は修學中學術と實地の取引練習を必要とし地方物産たる柑橘を輸入して太平洋沿岸に試賣せしに彼地に於ては未だ此種のもの販賣し居らざるを以て大失敗に終れり然りと雖も米人の果物を嗜好するの甚だしきと冬期柑類の欠亡せる爲め將來大に有望なるを信じ不撓不屈一回の損害の爲め中止するなく翌年も同様輸出を試みたりしに不幸なるかな此年も亦腐敗の爲め倒産に近き迄の失敗を招けり然れども彼の地各階級を通じて之を試食せしめ遂に甘味に富めると日本柑橘は比較的低廉なりとの好評を得るに至れり、而して明治廿六年大に販路を擴張し前途大に有望となりしを以て同廿八年益々此業の擴大を計らんが爲一先歸朝して嚴父と相談の上英領加奈陀へ輸出を計畫し同廿九年再渡米して殆ど米國各地に渡り特約と締結し併せて落花生豆類及米穀等の輸出を試みたり然るに柑橘に於ては相當の成績を揚げ得たり

りど雖も落花生の如きは當今未だバナニヤ産のみ使用して外國産のあるを知らず販賣上大に困難を感じたり、是に於てか不得止各地にて委託販賣をなさしめ年と共に日本産の高評を得遂に需要増加の曙光を見たりバナニヤ生産者之を見るや各方面より防害を試み或は我生産物を扱ふものにはバナニヤ産を扱はしめず或は煎屋と提携して日本産を排斥せしむる等種々なる手段を講じたりき然るに幸にして其需要益々増加し今日に至り或方面の如き全然他國産を扱はざるに至れりと又君は明治三十年初めて支那産胡桃を北米合衆國及英領加奈陀等に輸出する如き前同様の失敗を招けるも今日に至り毎年數萬噸の輸出あるは君のあらゆる犠牲の結果と云ふべし全く君を以て前陳の如き米國に於ける柑橘落花生及胡桃の輸出は君を以て嚆矢となすと云ふ、大正七年七月和歌山市南楠太郎、竹中源助、神戸市岩川與助氏等の賛成を得て資本金壹百萬圓の株式會社を組織し藤田商事株式會社と稱し取締役社長として本店を神戸市三宮町壹丁目支店を北米合衆國桑港セントラル及英領加奈陀バンクバー等に設け輸出入事業に従事しつゝあり君は明治廿三年初めて米國に渡りしより本年に至り實に二十四回往復せりと君常に曰く商業の發展を計らんとすれば需要地の實況を踏査し其嗜好の如何及變化を講究すると共に得意先と懇親を結ぶは尤も必要なり我實業家の此点に留意を欠くは實に遺憾に堪へず仍て余は毎年一回は必キ米國を一巡すこ我實

業家たるもの大に君に學ぶ所ありて可ならずや令聞との間に二男一女あり何れも壯健にして家庭又圓滿なり現住所縣下那賀郡名手町六十六番地

川村病院長 川村恒夫氏

人に尊ぶ所のものは其の實力にあり名如何に高しと雖も實際の力量之れに伴はずんば果して何の甲斐あらんや川村恒夫君の如きは徹頭徹尾其實力を以て世間に處し今日の地位を作りたる處の人眞に後進青年の模範となすに足れり君は安政三年四月を以て縣下有田郡鳥屋城村大字市場故川村恒龍氏の男に生る君の家世々醫を以て業とするを以て君又夙に醫師たらんと志し年齒十有九歳にして當時市内に於て聲威隆々たるの醫師小山健三氏に師事し致子々々して勉め屹々として勵むこと五年遂に醫師開業免狀を得廿有四歳にして那賀郡名手町花岡病院(故花岡從賢先生)和歌山分院長となり 診療を爲すこと茲に四年廿有八才にして去つて泉州樽井に醫院を開き居ること二年、卅歳の時堺市に移轉して更に居ること七年、三度大阪市西區松島に移轉して私立川村外科病院を開設し茲に居ること四年、四度同市南區木津に移轉し茲に居ること七年、當時の川村病院は患者踵を接し門前常に市を爲すの盛況を呈せるを以て自然同病

院の狭猛を感じ爲に止むな、五度現在の病院所在地たる同市西區新町通り二丁目に移轉して日に益々盛ゆ現今の川村病院は常に醫員六七名と十數人の看護婦とを督してさしもに廣き浪華に於ても屈指の大病院たるに至れり、當今の川村病院は一般外科の外皮膚科をも併診し居れりと而して爰に特筆すべき一事あり這は餘事ならず君が松島に於て開業せし當時より「瘧」を治療するの薬餌と手術を研究し有謂苦心を重ね、遂に身体何れの部分にても「瘧」あるものは之を「除去」することを發明し、之を全國醫師會に發表したるに醫學博士の多き我國に於ても君の此の發明に感歎せざるものなしと云へり、君曰く「此の發明には随分苦心をしたものだ、世界醫學の源泉たる獨逸國にもまだ此の發明がないのだ、顔一面に「瘧」があつて鬼の如な人でも短時日にして之を除去することが出来ますよ」と以て其の得意思ふべきなり令闈ふく子(當五十九才)は泉州貝塚町の名望家醫師新川定一氏の長女にして夫妻の間に一男一女あり長男定雄君(當二十七才)は去る明治四十一年千葉縣醫學專門學校を卒業し目下川村病院に在つて父君を助け、長女静子は相愛女學校を卒業したる才媛なりしが神戸市のマツチ貿易商轟嘉平氏の長男健次君と結婚し居れり、君の趣味は「義太夫」と謡曲にして時に大に唸つて友人を驚かすことありと現住所大阪市西區新町通り二丁目四十六、四十七番地

實業家 吉益匡賢氏

君は慶應三年八月五日を以て縣下那賀郡川原村に生る明治廿三年町村制實施の際川原村収入役となり同卅年助役に擧げられ四十年川原村長に擧げられ大正六年三月迄村長を繼續す此間日露戰役の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はる明治四十三年十月縣會議員の補欠選舉に於て議員に當選翌四十四年再選せられて大正四年九月迄其職にありたり其間和歌山地方森林會議員、那賀郡農會副會長、和歌山縣農會議員等各種の公共事業に従事せられき

大正六年二月那賀郡東部の有志者及養蠶家等地方開發の手段として株式組織にて那賀郡製絲會社を創立するや押されて社長となり今尙其職にあり又一面に於ては明治四十二年那賀郡内柑橘業者組合を創立するや推されて副社長となり大正三年三月堀内社長の辭職するや社長に就職し今尙其職に在り

資性温厚篤實にして、而も信義に篤く、現時の濁世に處して毅然として君子の風格を備ふ、而も頭腦又明晰其の縣會議席に列するや、諄々として説き、滔々として辨じ爲に當局及び同僚共に君を畏敬せり又村長の職に居ること十有餘年能く村治の爲に盡瘁す従つて村民の君を見ること赤子の慈母に於けるが如かりしと而して今は本縣の特有物産たる柑橘同業組合の爲に將た我國産業の爲に貢献せらる又以て偉

なりとす 令聞ちか子との間に二男三女あり長女富美惠子は那賀郡山崎小學校長前田勝太郎氏に嫁し二女壽惠子は藤田商事株式會社員山中隆義氏に嫁し、其の他何れも家庭に在り現住所那賀郡川原村

———

輸出協會株式會社 專務取締役 小川忠次氏

凡そ人の成功をなすや周圍の薰化其の宜しきを得て而して成功するものなること茲に喋々の辨を要せざるも、君が今日成功の緒に就きたるも全く四圍の感化と君が聰明の質と兩々相俟て其の是に至らしめたること疑を容れざるなり

今君の經歷を擧げんに君は明治二十三年を以て本縣海草郡宮村大字北出島に呱呱の聲を擧ぐ今の祖父の代迄は那賀郡池田村西三谷に於て米穀商を營み同地太田神社の直系なりしも維新の際故ありて嚴父が小川家を繼ぐに當りて小川姓を名乗るに至りし者なりと然り而して嚴父は勤儉力行を信條となし世に處したるを以て君又幼少の時より之に感銘したるのみならず君の叔父糸川龜之助氏の奮勵を見聞し及び高垣良三郎氏等の薫育を受けつゝ以て成人したるは乃ち君の今日ある所以なりと而して君の實業界に入り

し第一歩は明治四十三年紀陽綿布會社に入りて綿花、石炭の課を受け持ちたるに初まりしも同四十四年會社を辭し豫て君の宿望たりし支那の狀況調査を思ひ立ち同四十五年渡清して天津に至り同地三井物產會社支店に入り大正三年に至る迄同支店に於て活動し同四年同地に於て獨立綿糸、綿布の輸出入業を經營して同六年十二月に至りしも郷家の相續者たるの君として永く海外に留まる能はざるの事情に依りさしも繁盛に赴きたる店舗を斷然閉鎖して大正七年一月歸朝し爾來舊和歌山捺染、綿布輸出協會會員となり市内捺染業者の發展の爲め同會の目的たるチール更紗の見本を海外又は内地各地輸出入業者に配付し爲に輸出をして益々旺盛ならしむべく努力せらる。而して本年春期株式會社和歌山捺染綿布輸出協會の創立せし以來之れが専務取締役として就任せしに開業當時より恰も財界の大變動に遭遇したるも奮勵努力の伴ふ事業の經營には好不況の差別は全く眼中に無く社長渡邊綱五郎氏の鞭撻と相待ち君の信念を遂行するに諸有障害を乗越へ財界の變動は我不關焉として超然事業を經營し居れり君又時間は金なりとの觀念を以て訪客に對し要件濟の上は直ちに退去を請ひ社是として之を實行し居れり従つて阪神地方の顧客は活氣横溢したる社内の實況を評して曰く不況時代に斯迄の經營者は稀に見る處なりと感歎して去ると云ふ君又忙中閑を割き先年支那に遊んで調査したる同地の地理及び商業事情を發展して一般輸出入業者

の參考に供し又は商業學校卒業生等に配付して公益上に資すること又多大なり又以て偉なりとす、君の年齒今僅かに三十一歳前途尙は春秋に富む國家の爲め將た縣下輸出入業者の爲め益々努力せられんことを熱望して止まざるなり、附記す君の實兄芳一郎君は彼の紀陽綿布株式會社社長糸川龜之助氏の婿養子となり、令弟修三君は河内家を繼ぎ次男たる君は小川家を相續したるものなりと令閨幹子との間に長女秀子を生み、家庭は常に春風に滿つ、君の趣味としては他に何物もなく孜々として其の天職を追ふのみ、現住所海草郡宮村大字北出島

紀北蠶糸
株式會社長

羽端鹿助氏

敢て名利に汲々せず謹嚴廉直以て其の職に忠勤なる羽端鹿助君の如きは近世實に稀なり、今君の經歷を記さんに君は明治十年を以て縣下那賀郡田中村大字竹房故羽端德三郎氏の長男に生る、羽端家は元安倍姓を名乗り居たるに、昔時紀州藩公偶々鷹狩りを催ふして君の家に立ち寄りて休息せしに携ふるの鷹一大「羽バツキ」を爲せり、藩公曰く爾來姓を「羽端」と改むべしと以て羽端と改姓するに至りしものなりと、君幼にして聰明長じて村民の推服する處となる、大正四年十月那賀郡々會議員に當選し、續いて郡

參事會員となりて郡治の爲に盡瘁せらるゝこと大なりし、然り而して

- 一大正五年小田井普通水利組合委員長に選舉せられ
- 一大正六年四月田中村農會及び同蠶種製造部理事に推選せられ
- 一同年五月田中村、池田村乾繭組合を起し同組合長に選舉せられ
- 一同年六月田中村、池田村、農業倉庫を起し同主任に推選せられ
- 一大正八年那賀郡地主會評議員に選ばれ
- 一同年二月那賀郡養蠶同業組合副組長に推選せられ
- 一同年三月和歌山縣蠶業調査委員を囑托せられ
- 一同年十月田中村々長に選舉せらる

又實業方面に於ては大正九年二月紀北蠶糸株式會社を創立して同社の社長となり以て今日に至れり、嚴父徳三郎氏は明治四十三年五十七才にして實母タツエ子は大正六年六十四才にして何れも此の世を去る令閨きよ子は君の原籍たる同村根來由三郎氏の長女にして明治三十一年を以て華燭の典を擧げ二男二女を設けたるに不幸にして二豎の犯すところとなり本年六月三十八才を以て黃泉の客となれり、長女幸子(二十才)は大正八年奈良縣櫻井高等女學校を卒業し、長男寛一(十六才)は目下那賀郡立河北農蠶學校に通學し、二女恒子(十三才)は田中小學校に通學し、二男清二(七才)と共に何れも家庭に在りて以

て父君を助く現住所那賀郡田中村大字竹房二百四十五番地

帝國大學教
授理學博士

小川 琢治 氏

我紀州は南太平洋に突出したる一大半島にして其の形琵琶の如く、西南は洋々たる大海に臨み、東北は山岳重疊し、其風景自ら雄大なり、殊に南熊野の如きは、斷崖絶壁碧海に迫り、白浪岩を嚼んで碎く其の莊重にして雄大なる全國に其比を見ず、古來山岳に富めるの地多くの偉人を生じ、我が熊野の如き亦偉人の生まるべきの地なり、君小川氏の如き人材を出したるは蓋し我縣の誇りとすべきなり、今君の經歷を記さんに、君は明治三年五月二十八日を以て縣下西牟婁郡田邊町舊藩士儒者淺井篤氏の次男に生れ、後小川駒橋氏の養子となり小川家を襲へり嚴父篤氏字長毅周南と號し後南溟と改む、四代の祖は和歌山藩士にして故あつて浪人となり攝州小濱に寓し、後大阪に出で醫を業とす南溟幼にして後藤松陰に學び後京都に入り牧百峰(賴山陽の熟を繼承せる人)に學ぶ明治元年田邊藩主安藤直裕侯に聘せられて漢籍を藩士に授く廢藩の後和歌山に出でて私塾を開けり

君幼より家學を受け明治十六年和歌山中學校に入り十九年退學東京に遊び二十年第一高等中學校に入り二十六年東京帝國大學理科大學に入り地質學を修め二十九年卒業更に大學院に入り三十年一月退學して後農商務省地質調査所に奉職技手となる翌三十一年農商務技師となり三十三年佛國に出張を命ぜられ三十四年歸朝三十五年再び支那出張を命ぜられ北支那及び蒙古を踏査し三十六年歸朝三十七、八年戰役に當り大本營附となり滿洲の炭田を調査し沙河戰の時は烟臺炭坑に在り撫順占領後其調査に従事し厚さ百數十尺の大炭層にして炭量數億噸あることは此時初めて確實となる四十年間島問題の起るや又た朝鮮統監府御用掛となり豆滿江北の地方を踏査し四十一年歸朝の後京都文科大学に新設の地理學講座を擔當を命ぜられて轉任文科大學教授となり翌四十二年理學博士の學位を受く大學在學中日清戰役に當り東京地學協會の囑托を受け臺灣諸島誌を著はし地質調査所に入りて後常に東京地學協會の公務に與り地學雜誌の編纂に盡力し同誌に載せたる論文雜著數十篇あり夙に東亞の地質構造に關する研究に志し日本群島地質構造論は其の主なるものなりと歐洲出張の際巴里に於て佛國地質學の泰斗ミシエル、レブネー岩石學の泰斗ヲ、クロアの教を請ひ埃國維也納に赴き獨逸地質學の巨擘にして「地貌學」の大著あるワウスの門に入つて學べりと

京都大學に轉じて後支那に遊ぶこと五回最近世界戰爭後歐米に派遣され昨年十一月出發本年六月歸朝せらる、足、屢々支那に入り燕京の石鼓を撫し岱岳の秦碑を仰ぎ曲阜の漢石を觀龍門の佛像を拜し稍東洋考古學の趣味を興し大正五年冬燕京に赴き魏唐の古石佛古陶甕等を獲て還り最近渡歐の際には希、羅拉其他の古地理書を齎らせりと又偉なる哉

令閨小雪子との間に五男、三女の小寶を有し長女は既に他に嫁す家庭は常に圓滿にして小川家萬々歳たり、現住所京都市上京區河原町通廣小路下る東櫻町(電話上三八三五番)

和歌山縣技師 榎本精造氏

紀南勝景地の一たる扇が濱の邊りは西牟婁郡田邊の地たり、此地素と、國老安藤帶刀の居城にして今尚ほ城址ありて藩政時代の俵を偲ばしむ、君榎本精造氏は明治十四年十月を以て此地の藩士榎本重義氏の長男に生れ、明治三十三年縣立田邊中學校を卒業したる後同三十五年大阪高等工業學校に入學、同三十七年同校を卒業せり、卒業の後直に大阪鐵工所に入りて鑄物工場を擔當したり時恰も日露戰役に會し

鐵工業者の如き非常なる繁忙を極め、従つて晝夜兼行の状態にて勤務爲したる爲め心身共に非常に疲勞し遂に病痾となりたるを以て己むなく同三十九年八月同鐵工所を辭職し病ひ癒ゆるを俟て同年十一月和歌山縣警察技手を拜命し、工場原動機検査を擔任したる後、工場監督官補となるに至れり、而して大正八年十二月遂に技師に任じ從七位に叙せられ以て今日に至る。

資性温良にして、而も職務に熱誠なる官途に従事するの身としては眞に適材適所と云はざるを得ず、令閨秀子(當二十八歳)は市内駿河町生駒忠平氏の次女にして夫妻の間に二男を擧げたるも長男は夭折し次男晁和君(四年)と共に家庭圓滿に和歌山市駿河町貳拾九番地に住して職務に精勤し居れり

自叙 編者 山崎傳之助

自分の事を自分で書くことは所謂手前味噌で甚だ可笑しくはありますが、本卷の末尾を汚して私の最も波亂に富んだ半世の愚歴を紹介致して置き度いと存じます。私は明治六年六月八日を以て草深き有田郡糸我村の土百姓山崎助五郎の長男に生まれました、尤も私の家は所謂水呑百姓でもなく愚父は有田郡でも何んとか蚊んとか云はれたものですが誠に事業好きで柑橘の販路擴張を計つたり、千葉縣地方で開墾を遣つたり、東京横濱地方で果實蔬菜の問屋業をやつて見たり種々雑多の事業を營みまして失敗に失敗を重ね彼の明治三十七年日露戦争當時經濟界に大打撃のあつたときに遂に粉な微塵もなく叩き崩おして仕舞ました、恰度私が十六才のときに愚父が千葉縣で開墾を遣つて居りましたので父に随つて千葉縣に行き千葉中學に學びました、十九歳の時に同校を出た後は暫く放蕩に身を持ち崩しましたので父の怒りに觸れまして家出をしたのです、それから私は諸方を放浪致しまして其の結果明治二十六年以來俸給生活を致しました愛知、岐阜附近で巡查迄遣りました、葉烟草專賣所屬官も遣りました、栃木の裁判所で裁判所の書記も遣りました、さては遞信屬、内閣屬、貴族院屬と轉々として一人前ならぬ判任官で腰辨生活を續げたものです、私の日本大學を卒業したのは明治三十三年であります、俸給生活を遣

りながら夜學に通ひ勉強したのでありますから全く苦學をしたと云ふて好いのであります

明治三十六年當時は父が横濱市萬代町で果物蔬菜の間屋業を營んで居りましたが其時代私は内閣の統計局に奉職して居りました、處が多數の親族の人が上京されました父も既に老境に這入つて來たので長男たるお前は何時迄も月給取りを遣つて居るわけには行かぬではないか両親も年のお蔭で大分氣も軟かくなつて來たから辭職をして横濱の店舗で勉強して呉れとのことであつたので止むなく時の統計局長花房直三郎氏に話をして同官を罷め横濱の店に歸りました、當時の店は餘程の痛手を負ふて非常なる困難の地位に陥つて居りました、そこで北海道函館區末廣町の坂本兼吉と云ふ人外二名の人と父と私の五人の合名會社組織として横濱に本店を支店を東京、函館、小樽の三ヶ所に設け私は代表社員となつて盛んに活動をして見ましたが、折柄日露戦争が勃發致しました爲に同三十八年粉碎されました遂に開散するの止むなき羽目に立ち至りました、それからと云ふものは有田郡や横濱に残つてあつた財産も家も屋敷も全部賣却致しまして負債を償却し両親を愚弟に預け明治四十二年愚妻を伴ふて飄然和歌山市に來つたので言はゞ古郷に錦を飾りしにあらすして襤褸を飾つたわけでありませんが、再び俸給生活をやる氣にもならず儘よ職業として賤むべきものがないと觀念して和歌山市五番町で飲食店と旅人宿をやつたのです



處が日露戦争終熄後の當時は非常に景氣が好く微細かな商賣でも中々儲かつたものです、一日或る友人が遣つて来て君は實に、怪しからんではないか立派な教育がありながら何故こんな營業を遣るのか早速廢業して月給取りにでも歸つたらどうか若し此の儘繼續するならば斷然絶交をすると云はれたので私は職業として卑むべきものはない、他人の厄介になる位ならば車輓でも職工でも何でも壓ふ處でないから宜しく絶交をして貰ひたいと答へたことがありました

私は生來勝ち氣の性か兎角人様に厄介になることが大嫌ひであります綺麗な言葉で云へば獨立心が強いのでありましよう、故に他人に厄介になる位ならば三回の食事が出来なくとも厭はぬ質であります、こんな氣でありますから、苟も國法に反せぬことならば其の職業の如きはどんな事でも遣るのであります、辨當屋、宿屋何處が悪いのかと寧ろ怪まれてならぬ位でありました

妙な動機から私の操觚業を始めましたのはそれから間のない明治四十五年七月十三日であります、最初南海實業公論と題しまして有田郡箕島町を發行所として柑橘の機關と云ふ名目で一ヶ月三回宛發行したのであります、無論記者も廣告取りも一切合切單獨で遣りました、當時はまだ機械や活字を買ふ丈けの資力がなかつたので發行所が箕島町でありながら和歌山の關活版印刷所で印刷をして貰ふたので非常

なる不便を感じました、そこで種々奔走をしました結果機械と活字とを購入して發行所を和歌山市五番町に移轉し一ヶ月六回宛發行し同時に印刷業を開始して大に儲ける工風をしたのです、それは恰度大正二年の八月でありました、それからの私は不眠不休の状態で日夜奮闘致しましたお蔭で江湖の同情翕然として集まつて來まして大正三年九月遂に日刊新聞として題號を和歌山日日新聞と改題したのであります

此の間餘程の辛苦を重ねました凡そ世の中の事業で何が難かしいと云ふても新聞事業位難しい事業はありますまい、何故かと云ふと比較的に澤山の資本金を要してそしておまけに支出が多くつて収入の少い收支の償はぬ勝の仕事だからであります、假令田舎の一小新聞でも日刊新聞となりますれば五千圓や一萬圓の損害をするのはわけのない事であります、私の印刷業を兼業しましたのは新聞の損害を印刷で埋める積りで同業を兼業したのであります、果然新聞の損害丈けを印刷業の方で取り返すことが出来る様になりました

それから大正四年に至りて新聞社の建築を思ひ立ちまして、夫れ／＼友人に話しをして援助を乞ひ遂に同年現在の場所たる四番町壹番地に地所を購入して新築を爲し同年十月一大祝賀會を舉行したのであ

りました。恰度此の年でありましたが縣會議員の改選がありましたので私は郷里有田郡有志の勧めに依りまして同郡から候補者の一人となりました處が首尾能く當選の榮を得ましたのは決して私の力でなく祖先の威光が手傳つて呉れたのと村人が終日終夜東奔西馳私の爲に盡して呉れたことが與つて力あるものと確信致します當時私の出ました系我村では一票の缺くる處なく全部私の爲に投票せられたことを感謝すると同時に終生忘却せぬ次第であります。然るに縣會の組織に當りまして私は非政友派と組みして少数に陥りましたのは餘儀ない事としまして、而も事大思想に驅られたる同志は年一年と減少しまして最後の四年目には同志僅かに三人となつたのであります。力のない生鞍議員としては有り勝ちの事ではあります。今時の似而政治家の腑甲斐ないには喫驚れないわけには行きませぬ、併し議場に於て如何に正義の議論をしても多数の爲に遮二無二で否決される程癩癩なものはありませんが左ればとて一旦少数に組みしたものが假令如何なる事があるとも多数派に降を乞ふが如きことは翠丸を下げた男子の爲し能はぬ處であります。

彼の大正六年寺内内閣が議會を解散されたときに縣會より關聯したる男子の生氣地として候補に立たなければならぬ羽目となり遂に憲政會の公認候補として落選を期して和歌山市部から候補に立ちま

したが豫期の如く落選いたしました併し當時の投票二百六十三票に對しては感泣致しました。私の憲政會に入黨したのは此の時であります。私の經營する新聞は素と無色透明不偏不黨であります而も私自身も又政黨には關係がなかつたのであります。唯道義觀念の普及と僞紳士の跳梁を防遏せむことに努むるの外富貴に阿らず權門に媚びず、所謂是れ是とし、非を非とし、善を善とし、惡を惡とし、直言直筆を以つて其の主義と致しました。随つて私の携ふる六寸の鉛筆と三寸の舌は時に醜類の肺腑を抉ぐることがありましたらう。又私の懐にせる一冊の手帳は淨玻璃鏡の如く魔族の腐腸を照すこともありましたらう。併し政黨に組みしたのは此の候補に立つたときが始めてでありました。何が故に政黨に組みし憲政會に這入つたかと申しますと由來我縣は政友會の跋扈跳梁の地で如何にも傍若無人の舉動に憤慨したのと他の一つは一縣一黨は弊害を生ずるの原因ともなるべきものと確信いたしましたので苦痛とは知りながら頭ま曲りの私は利害得失を外にして最も失意な憲政會に這入つたのであります。理智の人から見れば狂人めきた行動だと思ふでありますらう。

それから大正八年八月に至りまして和歌山縣勞動共益會と云ふものを組織しまして、同月十五日市内辨天座で發會式を舉げ之れが會長に推されました。私の此の會を組織しました趣意及び綱領は左の通り

であります

時代は急激に變遷しつゝ、あります社會も日々進歩をしてをります故に愚圖々々してをれば忽ち時代遅れとなります我々労働者もこの際大奮發をして時代に遅れぬ様に努めなければなりません。近時労働問題は如上時勢の進歩に伴ひまして随分喧ましい問題となりまた。今やこの問題は國際的となりまして來る十月には米國ワシントンにおいて世界の労働會議が開かれることになつてをります。我國では之れが代表出席者の人選に困つてゐるといふこと聞きました。夫れは我々労働者の中に最も優等の人を見出し得ないからであります。此風でありますから我が國の労働問題の解決も出来ませすまた何等労働者の威力を認められないのであります。我が國の現状は稍々もすれば我々労働者を奴隷扱ひにし、貧民扱ひにされて居る様な状況も見えます。労働者は生産器具でもなければ賃金奴隷でもありません、矢張り富豪資本家と同様に生れながらにして一個の權利を享受してをる人間であります従つて労働問題は貧窮問題ではなく社會公安主義と個人自由思想とが如何に調和すべきかの問題であります而してこの問題を解決するには決して他の人力を借るべきでなく労働者自ら解決すべきものだと思います何故かと申せば労働問題は労働者自身の問題でありますから労働者自身が自覺し發奮して我々自身地位の向上すべきであります。

其處で我々の地位を向上するに就ては到底個人の力ではその目的を達する事は出来なからうと思ひます、必らずや團結の力に依つてこの目的を達成しなければならぬこと、考へます。都會の先覺者は既に友愛會を初めその他種々なる團體を設けましてこの目的の遂行に努められてをります。我が縣は全國にても有數の工業地でありますから、従つて労働者の數も尠くはありません其處では是非とも我々が團結を爲すの必要があらうと思ひまして、茲に和歌山縣労働共益會なるものを發起を致しました次第でありますから、諸君か此際諸君の自衛のために、將また地位向上のために奮つて御賛成あらんことを希望致します

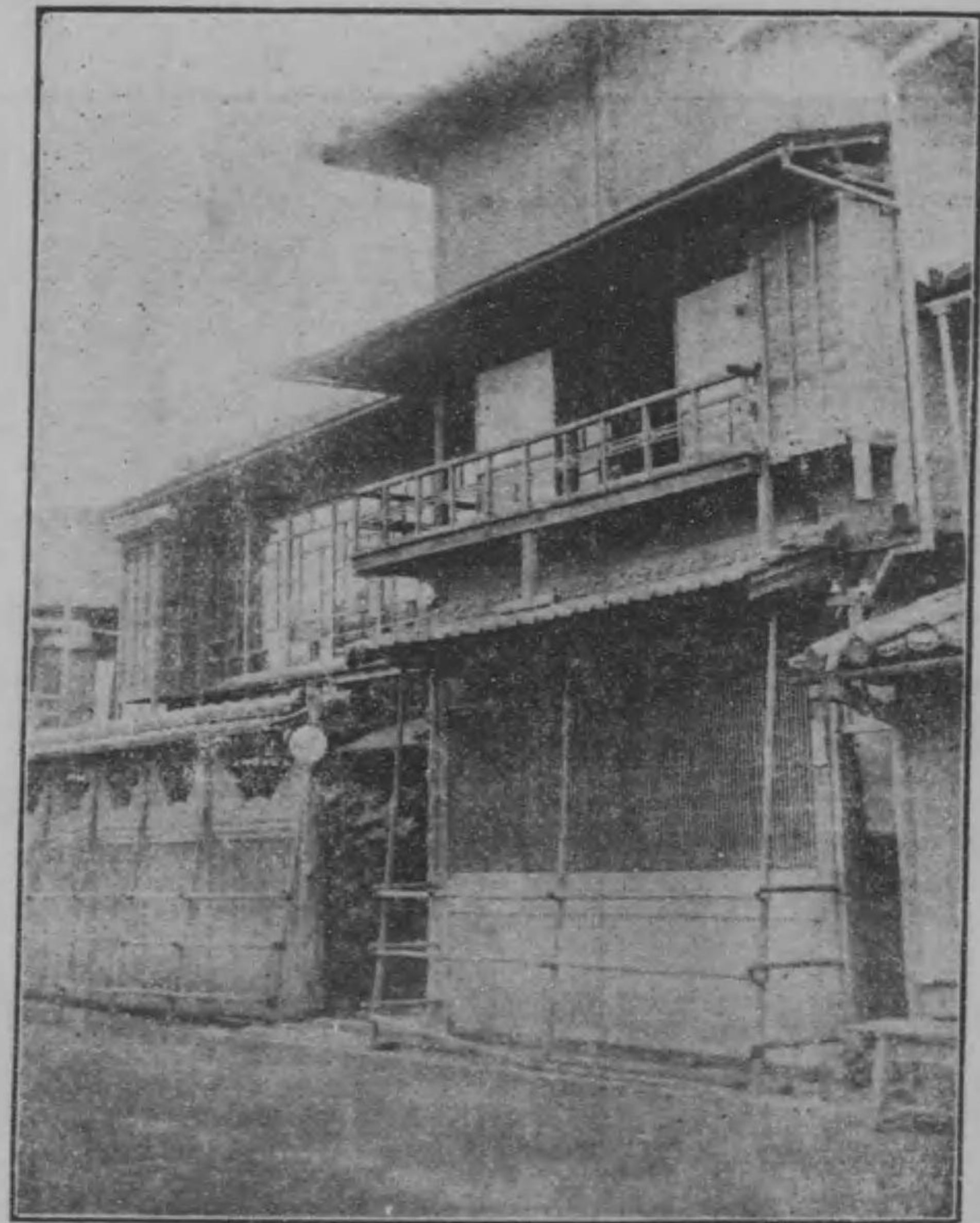
綱 領

- 一、吾人は互に親睦し一致協力して相互扶助の目的を貫徹せんことを期す
- 一、吾人は共同の力に依り着實なる方法を以つて地位の改善を圖らんことを期す
- 一、吾人は公共の理想に従ひ識見の開發、徳性の涵養、技術の進歩を圖らんことを期す
- 一、吾人は團結の力に依り労働階級の合理的發達を期す
- 一、吾人は自助的方法に依り労働問題の解決を期す
- 一、吾人は吾人の權利を主張すると同時に義務を重んじ能率の増進を期す

私の此の會を組織した爲に在ゆる富豪から大邊の非難を受けました、無論そんなことは豫期して遣つた仕事でありますか、本年二月原内閣が帝國議會を無暴不條理に解散しました爲に以前失敗の行き掛りがあり又男子の本分として候補に立たないわけには行かず、止むなく再び市部より憲政會公認候補とし

て出馬を致しましたが、時は政友會の天下であり、平生は富豪に反抗する私でありますから、此の時こそ好い敵打ちの時節が来たと思はれたものか市内の在ゆる富豪全部が私に反対したのと他の一は不徳不悃の爲に再び敢ない最後を遂げたのであります、全く私はこの選挙の爲めに物質的の大打撃を受けまして今尙ほ之れが創痍の爲に苦しんで居ります。市内の一角では私の落選の爲に日々新聞社も私の家屋も地所も今に賣りに出るだらうと噂されたさうであります、天道兎角に是なるもので、そんな憂目を見る程迄に行かないのは寧ろ不思議のことかも知れませぬ、併し私は今後ともにまたく俗悪社會と戦ひ千萬の迫害を受けつゝも大奮闘を續ける覺悟を以つて居ります、終りに望んで一言して置きますが、私の此の書の編纂を思ひ立つたことは巻頭の序文に記して置きましたから、一讀の榮を賜はらんことを希望して置きます。頓首百拜

御料理仕出し

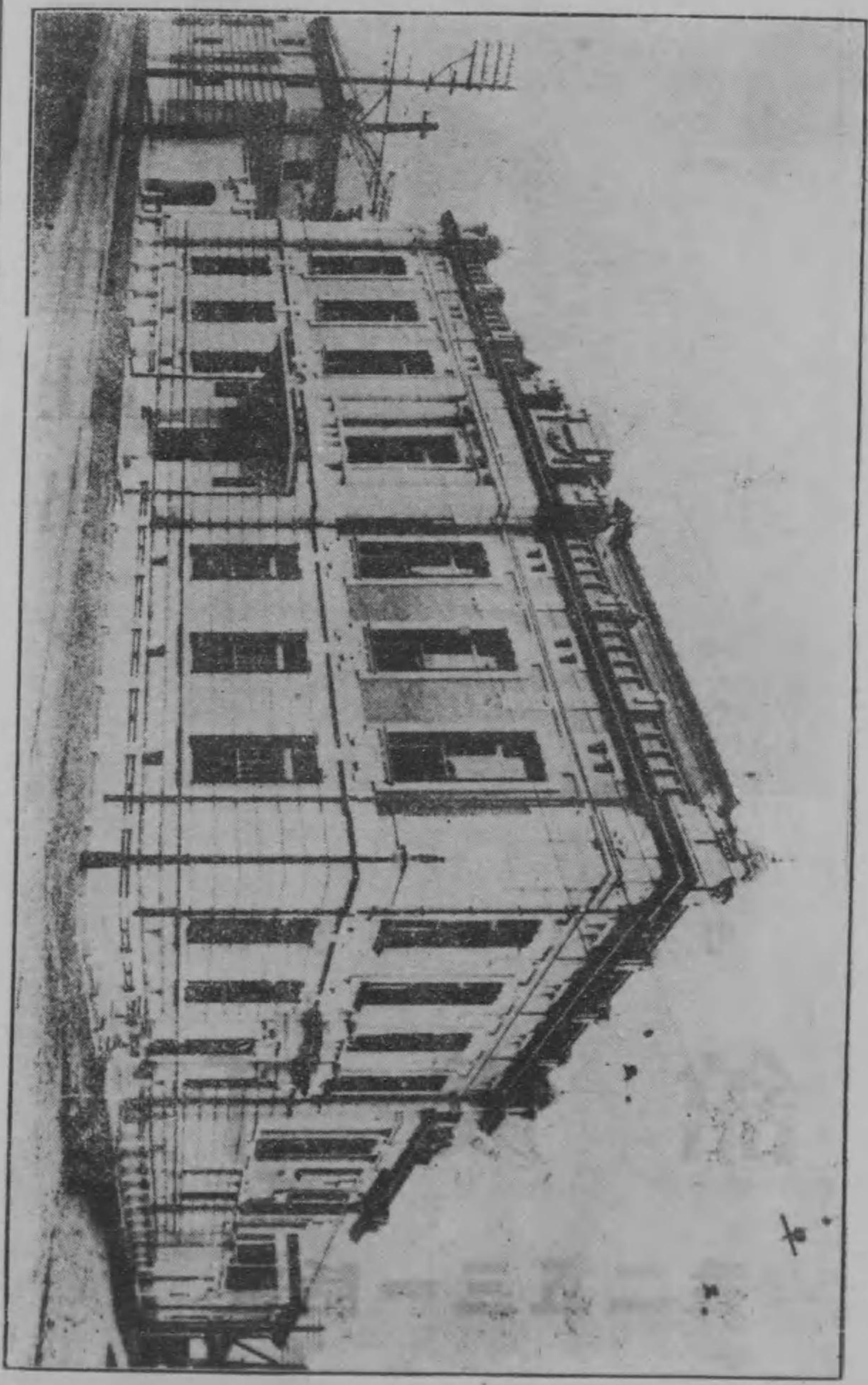


客室清潔なるは弊館の特色

町 番 十 市 山 歌 和

千 歳 館

番 二 五 三 一 話 電



資本金百六萬圓

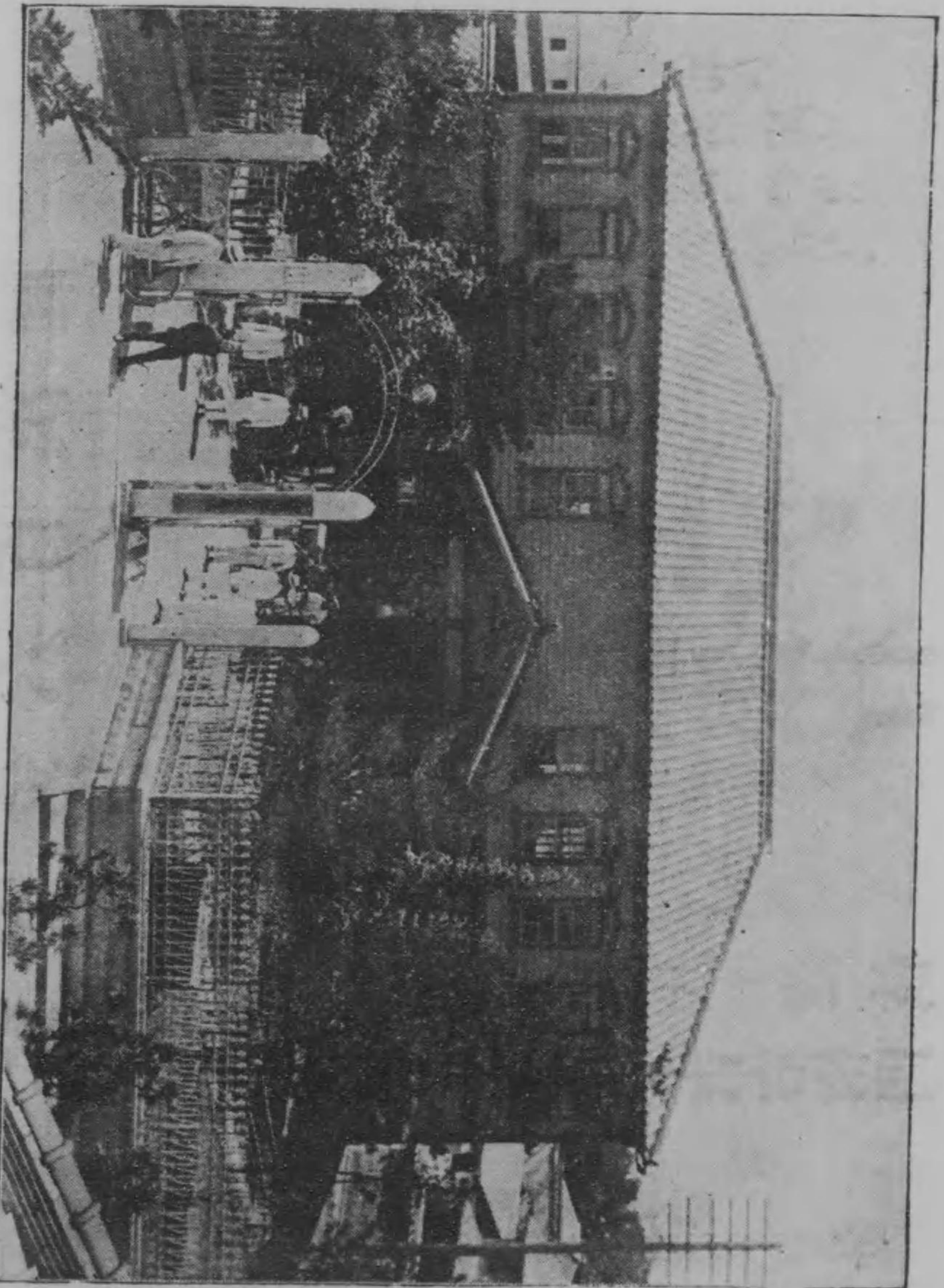
銀行一般の業務は精々御便利に御取扱
仕候爲替取組先は内外樞要の地に多數あり
御取引上至極御便利に有之候

頭取 宮本吉右衛門
取締役 北代 達枝
支配人 北代 達枝

株式會社 四十二銀行

電話 七六四四
六六七三番

支店 新通(市内)田邊、新宮、日方、
黑江、御坊、湯淺、岩出、
橋本、鹽津、箕嶋、南部、
所在地 粉河、五條、岸和田



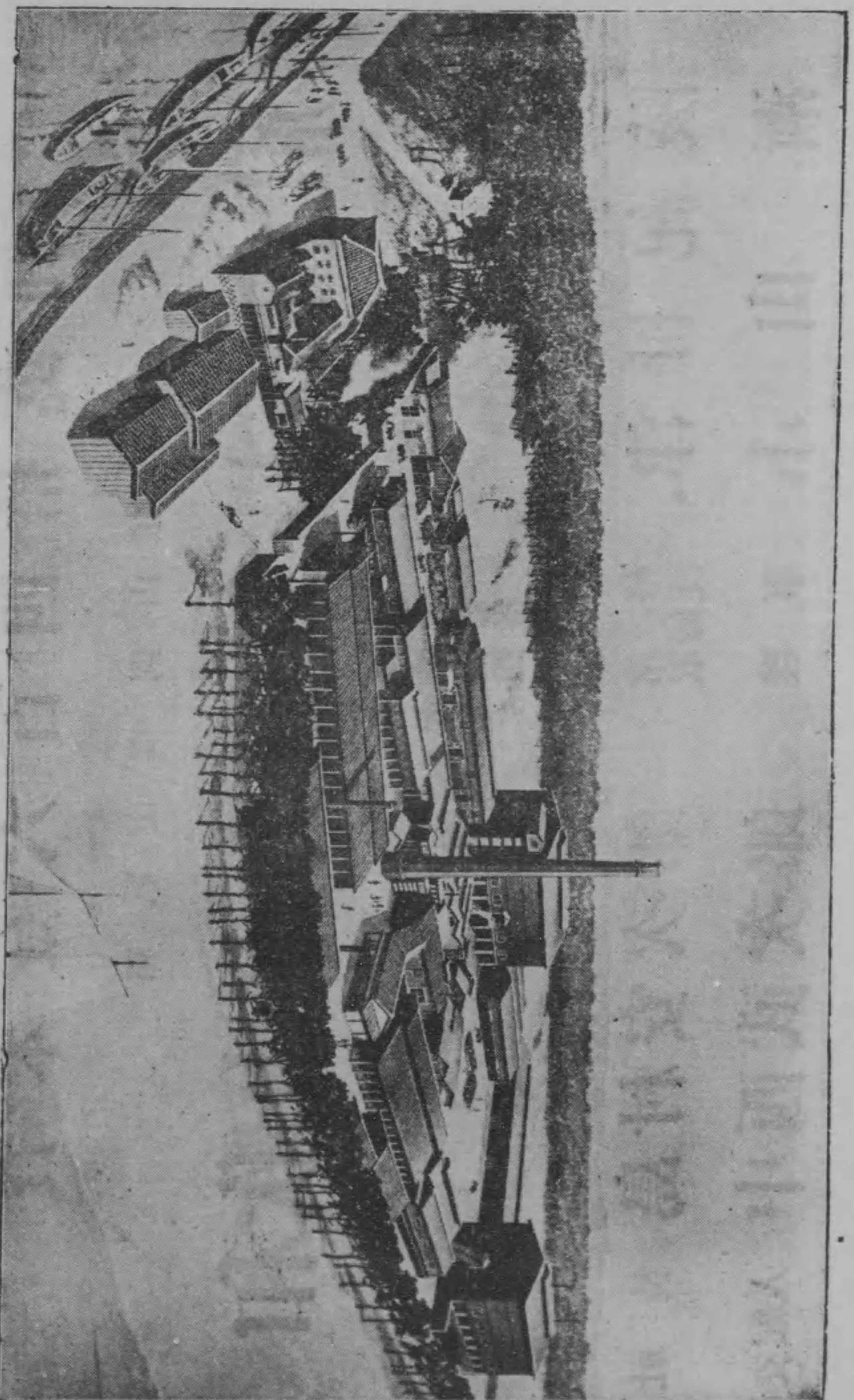
資 本 金 六 百 四 拾 萬 圓

和 歌 山 市 岡 山 町

和 歌 山 水 電 氣 株 式 會 社

電 車 課 番 號 七 七 七 六
 電 話 番 號 七 七 七 六
 常 取 番 號 三 三 四 六
 務 務 番 號 二 三 四 六

社 長	島 村 安 次 郎
支 配 人	中 西 武 次 郎
事 理	山 小 漸
常 取 務 務	津 村 紀 陵



南海晒粉株式會社

資本金壹百萬圓

取締役社長 北島七兵衛

查 役

北島七兵衛
廣田善八
小南方常楠
小泉米藏
名出義雄
上山市郎兵衛
名手由兵衛

營業項目

各種 晒粉 酸性 硫酸
苛性 曹達 硫酸
鹼 曹達 硫酸

本社 營業出張所 青岸工場 小雜賀工場

和歌山縣海草郡湊村大字湊千
三百四十二番地 電話七八三番
和歌山市本町二丁目八番地
電話四二九番 九八四番
大阪市西區京町堀通二丁目
電話土佐堀二八三四番
和歌山縣海草郡湊村大字湊字
青岸 電話七八三番
和歌山縣海草郡宮前村大字小
雜賀 電話四九四番

當社加工ハ最新式ノ機械ニ最進歩シタル技術ヲ應用ス多少ニ不拘御用命
ヲ賜リ度弊品御一覽ノ上兎角ノ御批評アラシム事ヲ

●加工營業品目

綿布 絹布 毛斯綸 更紗 綿ネル 無地染
捺染 糊付 艶付 晒白 其他一般加工

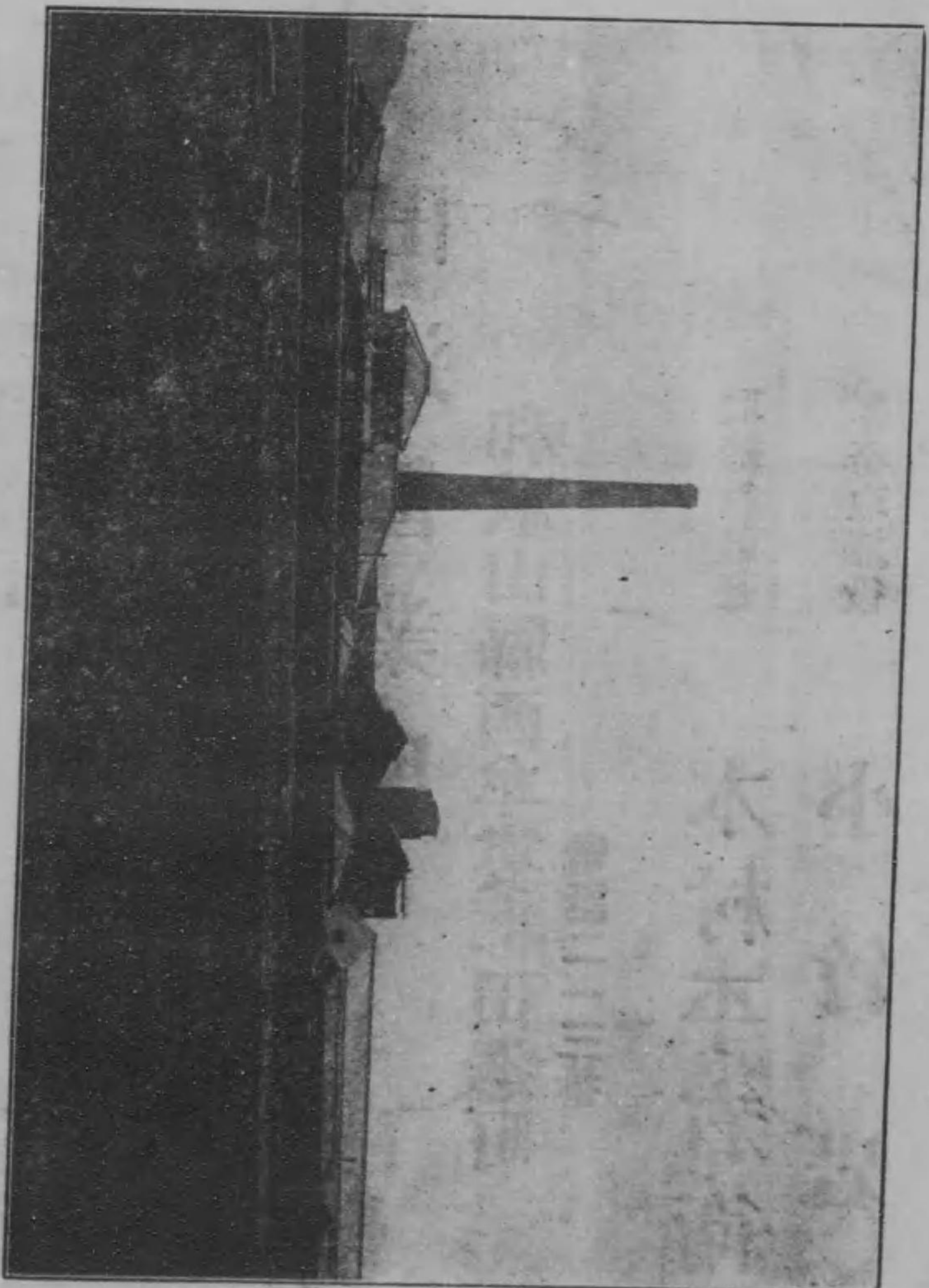
株式和歌山捺染綿布出輪協會

本店 和歌山市本町九丁目

電話 一一六一番
發電 畧語(ワナ)

取締役社長 渡邊綱五郎
常務取締役 小川忠次

常務取締役 廣曾正雄



取締役社長 糸川龜之助

紀和歌山 紀陽織布株式會社 電話 二六三〇番

日高川水力電気株式會社

御坊營業所

和歌山縣日高郡御坊町

電話三八番

田邊營業所

和歌山縣西牟婁郡田邊町

電話二二三番

取締役社長 木村平右衛門
專務取締役 小竹岩楠

資本金參百萬圓

頭取 戶田實

支配人 二宮狀太郎

株式會社 戶田銀行

和歌山市雜賀町

(米屋町濱)

電話 三一三番
九〇一番

取締役社長 楠本武俊
專務取締役 小川政次郎

旭セメント株式會社

本社及工場

和歌山縣日高郡由良港沿岸

營業所

和歌山縣日高郡御坊町

大阪出張所

大阪市西區北堀御池通二ノ四

東京出張所

東京市京橋區壺町一九
福姬ビルディング四階

資本金壹億圓

頭取 松方巖

和歌山支店長 浦野誠太郎

株式會社 十五銀行和歌山支店

和歌山市本町二丁目

電話 六二四九番
一五五八

倉庫用 六三三番

寫真器械並ニ材料品
洋酒 食料品
歐米文具品

縣下

一手

販賣

ブラトン萬年筆
ブラトンインキ
カフエーパウリスダ製品
コーヒソーダ
ヒラノサイダー

和歌山市本町壹丁目

日の出屋

電話一四七七番

公債株式現物賣買

和歌山市十三番町

⑩ 澳商事株式會社

電話 九七五番
一三九六番

取締役社長 澳太郎右衛門

資本金壹百五十萬圓

取締役社長

南方常楠

常務取締役

島藤太郎

日本織物株式會社

和歌山市元寺町五丁目

營業部專用

電話四六一番

工藝部專用

電話三〇六番

取締役社長

廣田善八

常務取締役

平松義孝

和歌山瓦斯株式會社

營業所

和歌山市三木町中ノ丁

電話一三〇番

工業所

和歌山市外中ノ島村

電話八二二番

資本金五十萬圓

取締役社長

濱田周次郎

御代正酒造株式會社

和歌山縣海草郡
内海村藤白

電話長日方十七番

取締役社長

木下七左衛門

内海紡織株式會社

和歌山縣海草郡
内海村

電話日方壹壹五番
壹五五番

資本金貳百萬圓

取締役社長

松居善助

專務取締役

太田儀右衛門

松太綿布株式會社

本社

和歌山市元町奉行町

電話 四〇八番

電話 一三二六番

電話 一三〇三番

分工場

和歌山市畑屋敷千体佛町

電話 四五四番

分工場

和歌山市外雜賀村大字須

電話 六六〇番



關西線妙寺停車場前
鐵道省指定旅館
會席料理
鶴聲館

和歌の浦

魚業專業 魚太本店 電話二八二番 電話二八二番 電話二八二番
振替大阪 三五〇番 一四〇番 八二一番

頭取 加藤 杲

株式會社 紀陽貯蓄銀行

本店 和歌山市本町一丁目

電話 二一五九九番

支店 和歌山市湊久保町三丁目

電話 五〇四番

支店 和歌山市外中ノ島

電話 一四二番

和歌山縣有田郡山原

山彦除蟲菊株式會社

電話箕島三六番

振替大阪一五九二番



海草郡日方町

南海水力電気株式会社

電話三六番
三三〇番

出張所

有田郡湯淺町

電話一五番

同

有田郡箕島町

電話一〇番

取締役社長

上山市郎兵衛

常務取締役

御前七郎右衛門

取締役

御前喜八郎

同

森田善次

監査役

木村政楠

同

玉置傳三郎

支配人

木村増三

内科小兒科耳鼻咽喉科



院長 坂口義譜

和歌山縣日方町

坂口病院

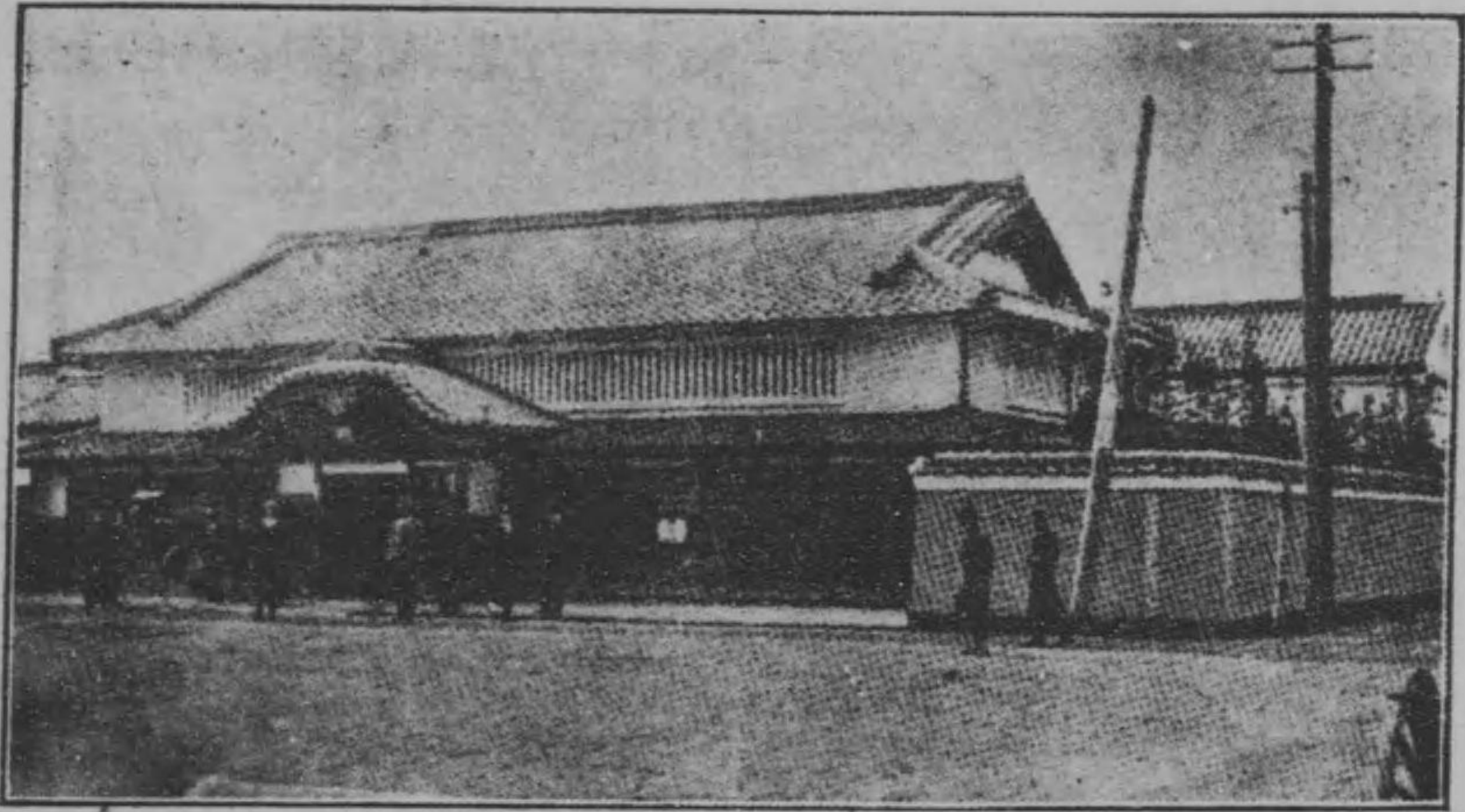
入院隨意 電話二八番

株式會社 正金貯蓄銀行

頭取 廣田善八
常務取締役 中岡喜助

和歌山市匠町

電話一二三三八番
一四一三番



和歌山縣農工銀行 株式會社

和歌山市南汀町電話四六八番

頭取 男爵 三浦英太郎 支配人 谷井類助

特許局登錄

日本一旭鳥除虫粉

帝國菊精株式會社

社長 御前喜八郎

工場所在地

和歌山縣有田郡箕島町

電話長箕島三十一番

振替貯金口座 東京九九二番 大阪一五八四番

營業所

大阪市西區土佐堀三丁目

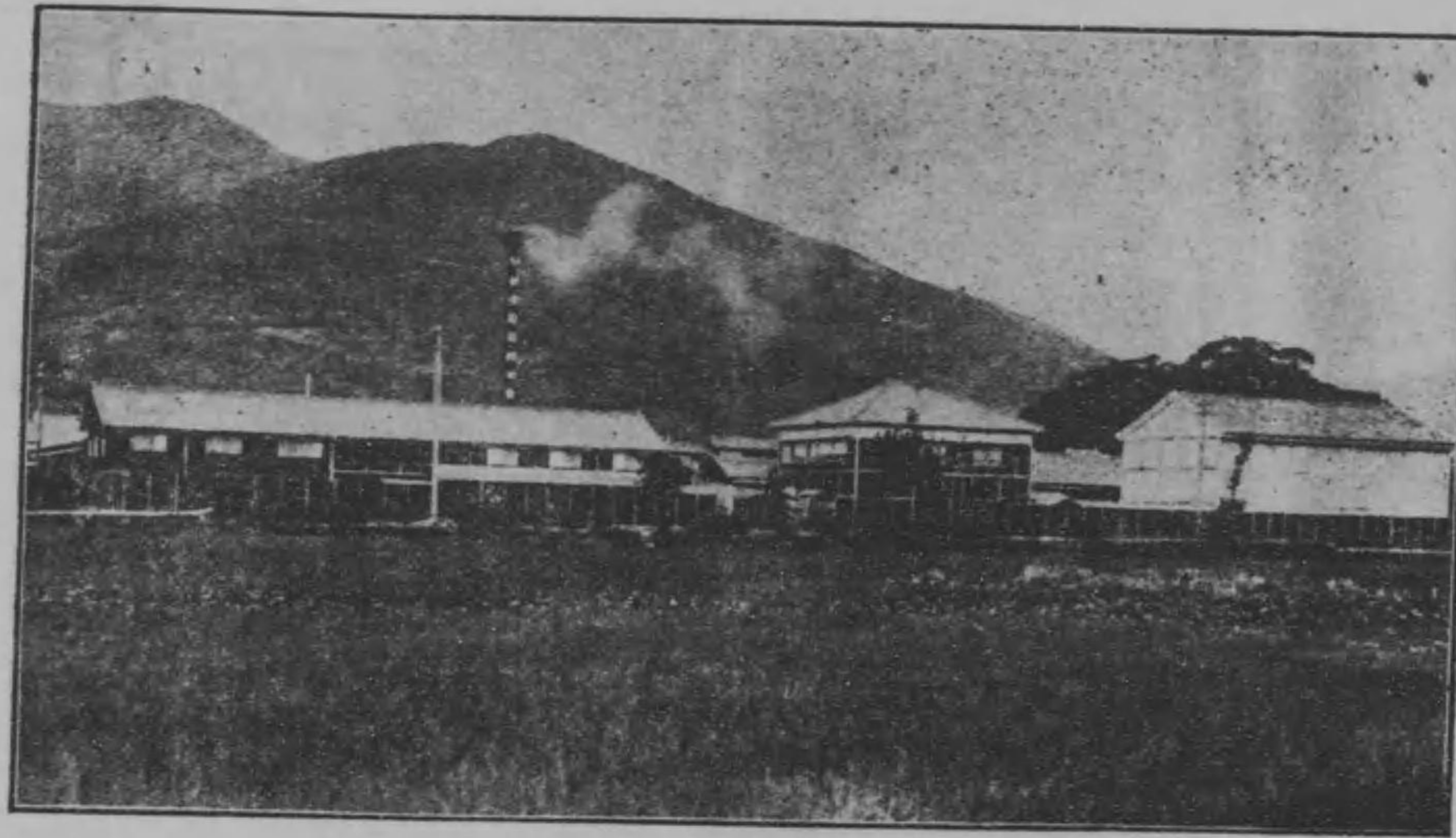
電話土六二六番

資本金壹百五十萬圓

大日本除蟲菊株式會社

工場

紀州有田郡山田原
大阪市外杭瀬



和歌山縣伊都郡妙寺町

妙寺製糸株式會社 電話一二番

株式會社
伊都銀行

和歌山縣伊都郡妙寺町

電話壹番

頭取 岡村宗助

株式會社
那賀銀行

和歌山縣那賀郡名手町

電話七番

專務取締役 藤田峰吉

資本金五拾萬圓



關西線打田驛前

紀北蠶糸株式會社

社長 羽端鹿助

資本金五拾萬圓

本社 東京市京橋區濱町

支社

大阪、京都、名古屋、仙臺、札幌
金澤、福岡、廣島、朝鮮

國際生命保險株式會社

社長 藏內治郎作

專務取締役 松村寬平

和歌山縣海草郡中ノ島村向芝

鐘淵紡績株式會社

和歌山支店

電話 長六八番
九三九番

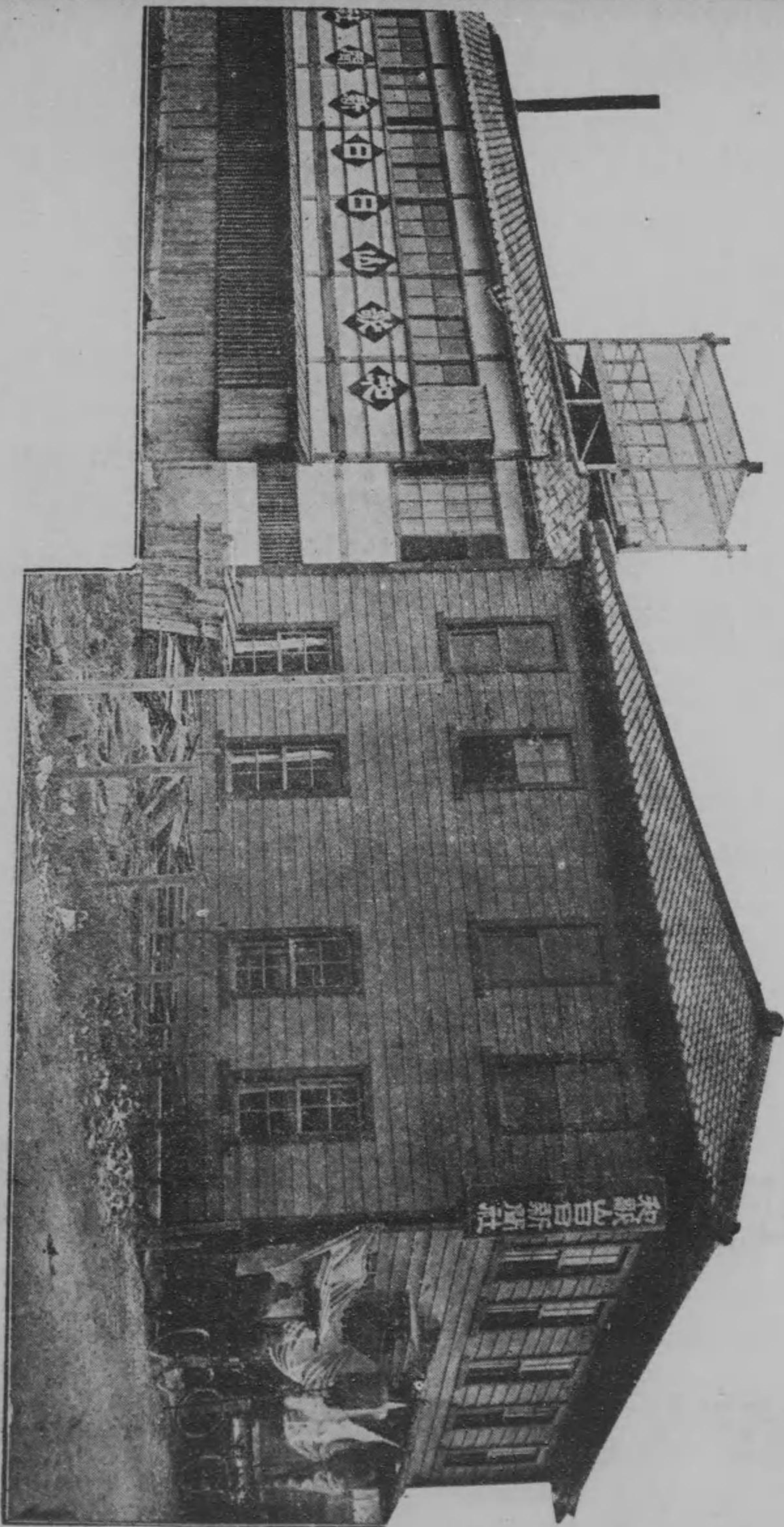
資本金壹千萬元

和歌山縣高日郡御坊町

日出紡織株式會社

電話四四番

社長 伊藤長次郎 專務取締役 大川英太郎



富貴に淫せず權門に媚びず縦横無盡に論難して
 敢へて何物の拘束を受けず常に社會改良を大主
 眼として民衆唯一の味方を以て自ら任ず
 報道迅速にして地方新聞の權威を持ち廣告の効
 力亦偉大なり殊に印刷部は迅速と廉價を以て生
 命とす

和歌山官新報

労働階級
 誰でも讀まねばならぬ新聞中の新聞!!

無産階級
 新聞定價 一部二錢 一ヶ月四十錢
 郵税 一部五厘
 廣告料 五號活字 一行七十錢
 印刷部 其他印刷部の設わり一般の注
 文に應ず

社長 山崎傳之助

和歌山市四番町一番地

發行所 和歌山官新聞社

電話 長六八五番
 振替 卷號 大阪二八三四番

支局
 岩出町、御坊町、湯淺町、日方町
 東野上、田邊町、大阪市、東京市

五

取締役社長 隅田 豐吉
 取締役 澤田 延
 取締役 壺井 金楠
 本社 奈良縣五條町 電話四五番
 支店 和歌山縣那賀郡名手町 電話二五番
 支店 同岩出町 電話五番
 支店 同池田村 豊田

五條製糸株式會社

丰

取締役社長 山田 章
 常務取締役 平井英四郎
 第一工場 和歌山縣那賀郡野上驛前
 第二工場 和歌山縣伊都郡學文路村 電話四〇番

紀州製糸株式會社

取締役社長 角田 宇兵衛

紀陽木材株式會社

本店 和歌山縣日方町
 出張所 同 新宮町
 出張所 同 田邊町

頭取 津村英三郎

和歌山縣日高郡御坊町

株式會社 日高銀行

支店 日高郡南部町 電話三六番
 支店 有田郡湯淺町
 支店 同 箕島町

内科専門

和歌山市九番町

近藤 病院

院長 近藤 節藏

入院隨意 電話八七番

齒科専門

和歌山市十番町(三木橋西詰)

彦阪齒科醫院

院長 彦坂幸太郎

電話一〇四五番

齒科専門

和歌山市七番町

十倉齒科醫院

院長 十倉 義男

電話一六七六番

齒科専門

和歌山市十番町

市川齒科醫院

院長 市川 宗義

電話一四五九番

齒科專門

和歌山市駿河町

明樂齒科醫院

院長 明樂包次郎

電話五七四番

内科專門

和歌山市雜賀町東ノ丁

吉田病院

院長 吉田彦一

電話七六七番

内科小兒科
泌尿生殖器科
皮膚科

和歌山市かじ橋東(元市場角)

桑原病院

院長 桑原一

入院隨意 電話一二〇番

産科
婦人科 診療

和歌山縣日方町

川村病院

院長 川村友吉

入院隨意 電話五二番

呼吸器病專門

淡輪療病院

院長 川村六郎

本院 泉州たんのわ海岸
分院 和歌山市湊北町一丁目

入院隨意 電話一七三二番

齒科專門

和歌山縣日方町字里ノ町

新谷齒科醫院

院長 新谷輝一

内外科

和歌山縣箕島町

藤原醫院

院長 藤原玄道

電話一六番

淋病梅毒皮膚病

和歌山市小人町南ノ町

滋野醫院

院長 滋野左右吉

電話七八一番

耳鼻咽喉科専門

和歌山市十番町

院長 坂井 龜定

入院隨意

電話七四三番

耳鼻咽喉科専門

和歌山市南汀町

院長 池田 昌克

入院隨意

電話七九二番

外科疾患傷害外科
整形外科

和歌山市屋形町一丁目

院長 丸山 震五郎

電話七一六番

内科 外科
エツキス光線科

和歌山市湊片原通り

院長 爲森 彌三郎

電話二二三番

外科専門

和歌山市表橋南詰

院長 花岡 芳朗

入院隨意

電話七四二番

肺結核専門

和歌山縣那賀郡野上

院長 野上 病院

和歌山市扇ノ芝

野上病院出張所

入院隨意

電話一七六六番

院長 宮西 寅之進

産科婦人科専門

和歌山市屋形町四丁目

院長 山縣 六郎

入院隨意

電話二五六番

耳鼻咽喉科専門

和歌山市三木町堀詰

院長 楠本 榮二

入院隨意

電話一一四五番

眼科專門

和歌山市三木町堀詰

木下眼科醫院

院長 木下行道
電話六四六番

耳鼻咽喉科專門

和歌山市十三番町

(京橋ヨリ西へ三丁)

宇治田醫院

院長 宇治田幸次
入院隨意

内科小兒科

和歌山市外今福

郭醫院

院長 郭嘉四郎
電話六九三番

産科婦人科專門

和歌山市紀和町

谷本醫院

院長 谷本精一郎
入院隨意
電話六〇八番

大正九年十一月十五日印刷
大正九年十一月廿五日發行

定價金九圓



著者

和歌山縣和歌山市四番丁壹番地

山崎霞舟

發行所

和歌山縣和歌山市四番丁壹番地

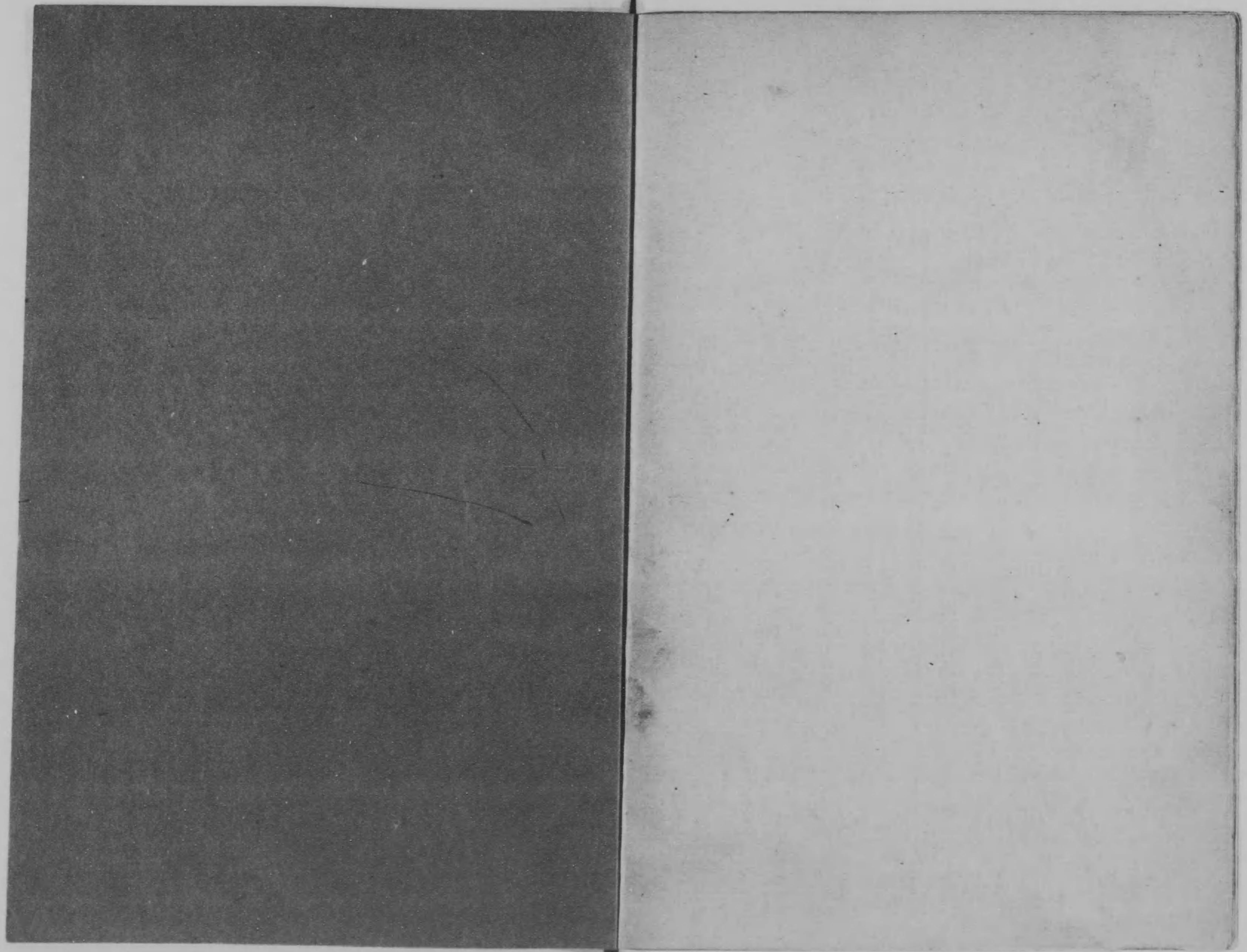
和歌山日日新聞社印刷部

發行兼印刷人

和歌山縣和歌山市四番丁壹番地

山崎峰

電話六八五番
口座大阪二八三四番



383
114

終